

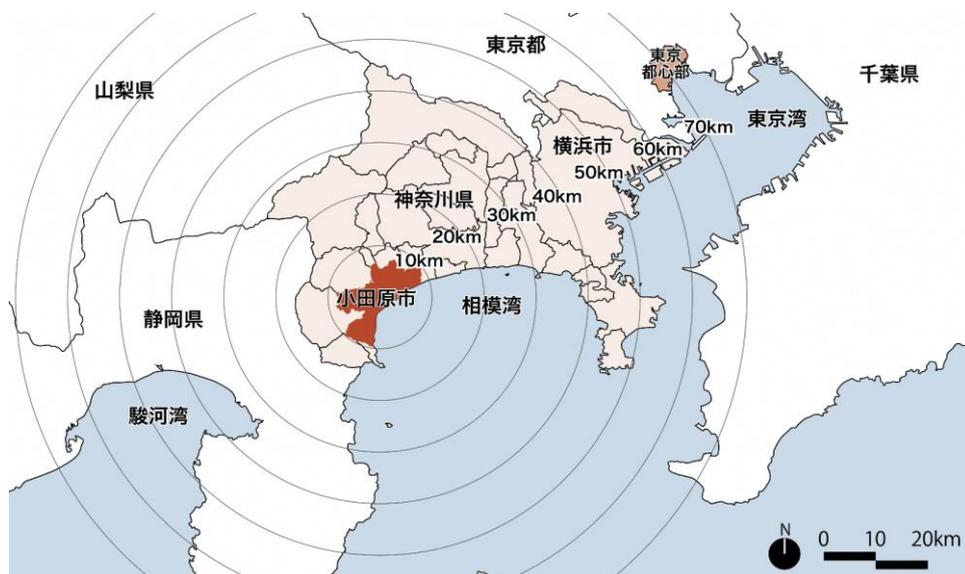
第1章 小田原市の歴史的風致形成の背景

1 自然的環境

(1) 位置

本市は神奈川県せいしゅうの南西部、東京都心部から南西へ約 70km の距離に位置する。市域は、東西 17.5km、南北 16.9km、面積は県全体の 4.7% に当たる 113.60km² (11,360ha) で、横浜市・相模原市・川崎市に次いで県内 4 番目の広さを有している。

市庁舎の位置は、北緯 35 度 15 分 53 秒、東経 139 度 9 分 08 秒 (世界測地系) である。市域の南西部は真鶴町・湯河原町・箱根町、北部は南足柄市・開成町・大井町、東部は中井町・二宮町にそれぞれ接している。本市は、16 世紀以降、湘南地域の西側に位置するこれら西湘地域の中核的な都市として小田原城と小田原宿を中心に発展してきた。



1-1 主要都市との距離

(2) 地形・地質

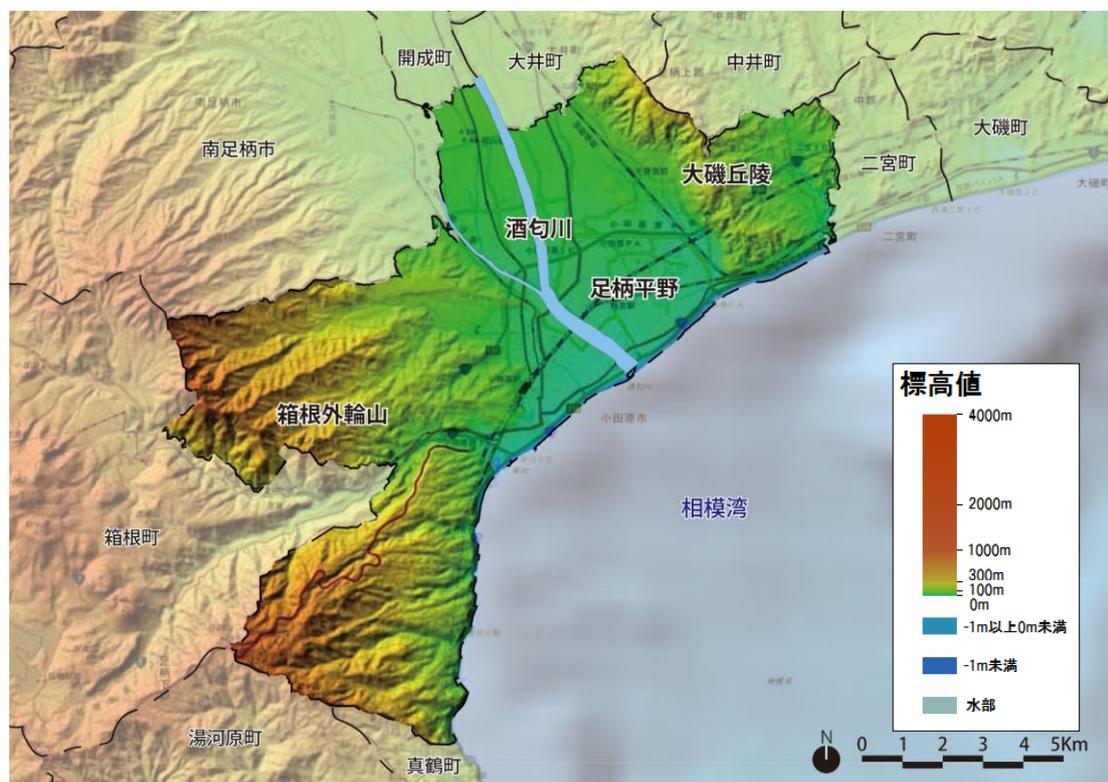
地形の上から本市は、大きく東部の丘陵地、西部の山地、中央部の平野の 3 つに区分される。

東部丘陵地は、曾我山そがやまと呼ばれる大磯丘陵おおいそぎゅうりょうの南西部に位置する。大磯丘陵おおいそぎゅうりょうは、本市の北側に位置する大井町、松田町から続く丘陵地である。断層活動により隆起して形成された地形であり、断層が走るその西縁部と後述する中央部の足柄平野あしがらへいとの境界は、直線状の急傾斜地となっている。

西部山地は、箱根外輪山はこねがいりんざんの東斜面と、その山麓にゆるやかに広がる軽石流堆積面の上に位置する。箱根外輪山はこねがいりんざんは、溶岩と火山砕屑物さいせつぶつ (噴火により噴出された溶岩流以外の噴出物の総称) で形成されている。軽石流堆積面は、山体の一部の岩石や空気と混ざり合った

高温のガスを含むマグマで形成されたなだらかで平らな地形である。その上層には、以後の噴火による火山砕屑物^{さいせつぶつ}が降り積もってできた関東ローム層という赤褐色の地層がみられている。

中央部平野は、足柄平野^{あしがらへいや}の南側に位置する。足柄平野は、酒匂川^{さかわがわ}により丹沢山地^{たんざわさんち}、富士山^{ふじさん}、箱根火山^{はこねかざん}から運ばれた砂や礫^{れき}が堆積してできた扇状地性の平野である。

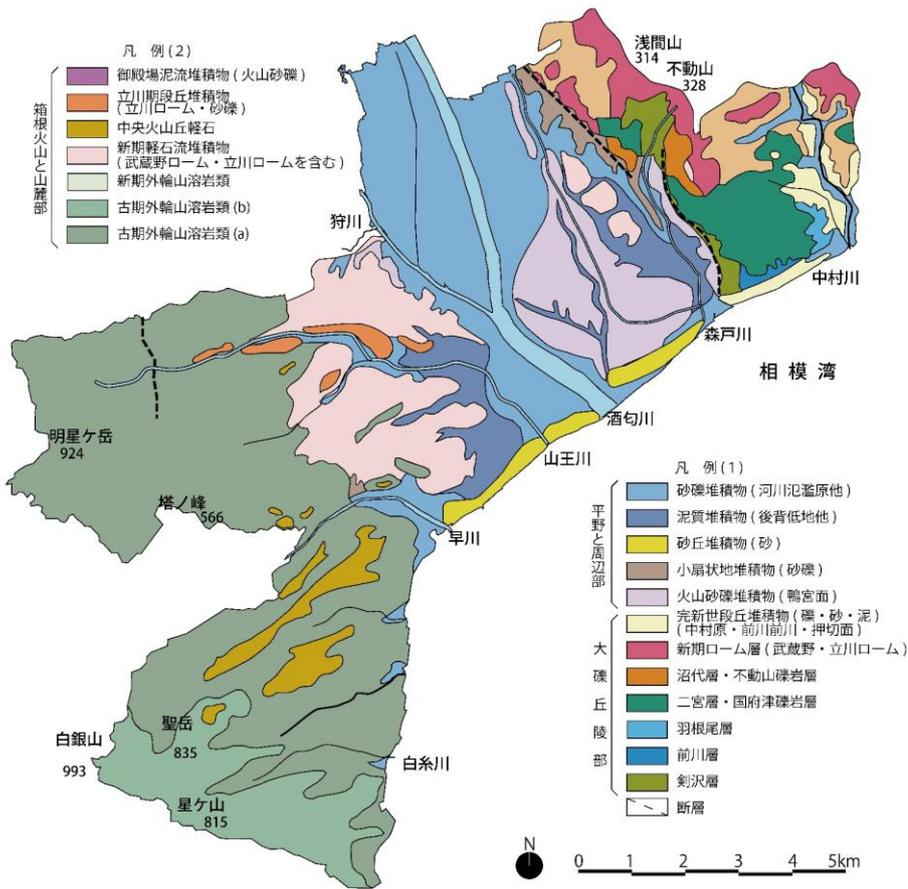


1-2 小田原市の地形 (資料「国土地理院ウェブサイト (地理院タイル)」)

(3) 水系、伏流水

本市を流れる主な河川としては、東から酒匂川^{さかわがわ}とその支流の狩川^{かりがわ}、山王川^{さんのうがわ}、早川^{はやかわ}があり、その他に、大磯丘陵^{おおいそきゅうりょう}や箱根火山^{はこねかざん}から流れる小河川がある。酒匂川は富士山東麓^{さかわがわ}、早川^{ふじさん}は芦ノ湖^{あしのこ}、山王川は箱根外輪山^{はこねがいりんざん}の明星ヶ岳^{みょうじょうがだけ}を水源としている。

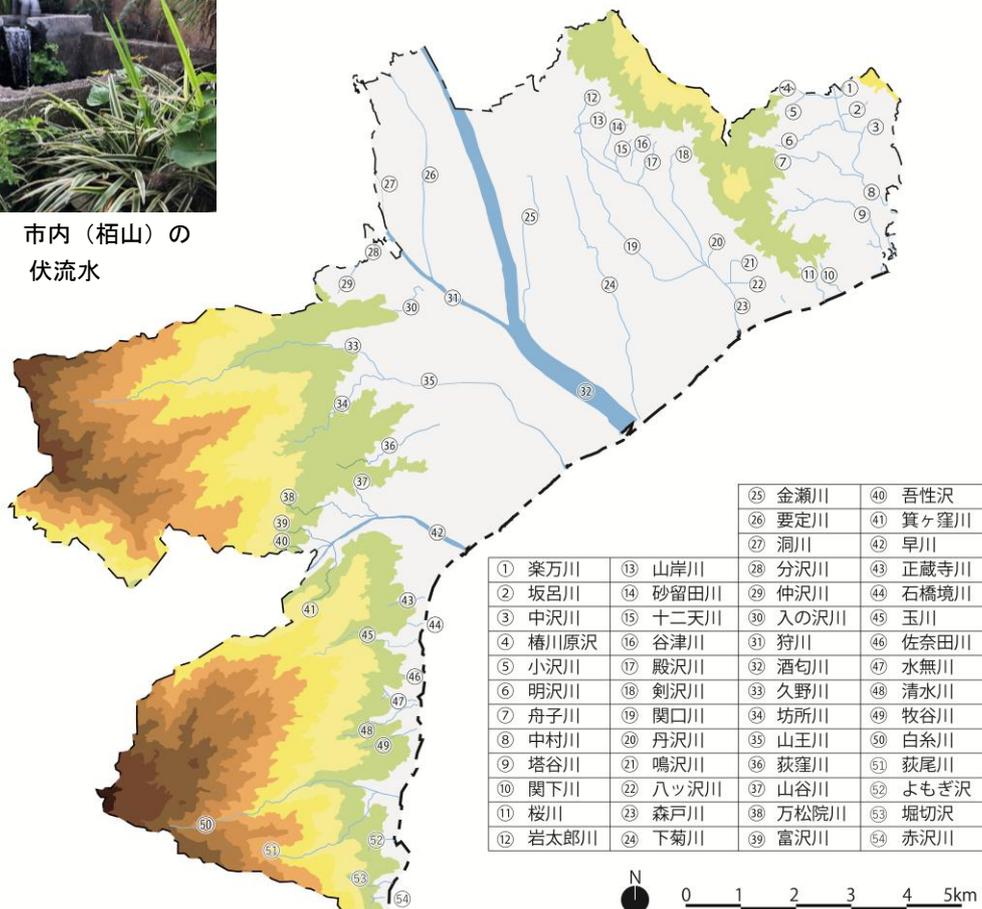
また、水を通しやすい性質を持つ扇状地性の平野である足柄平野^{あしがらへいや}の地下には、良質な地下水が貯えられており、周辺に湧水地を形成している。伏流水と呼ばれるこの地下水の多くは、酒匂川^{さかわがわ}等の河床から浸透したものであるが、水田に引かれた灌漑用水が浸透したものもあり、酒匂川中流域^{さかわがわ}においては箱根火山^{はこねかざん}や大磯丘陵^{おおいそきゅうりょう}の急斜面から流入したものなどもある。



1-3 小田原市の地質



1-4 市内(栢山)の伏流水



1-5 市内を流れる河川

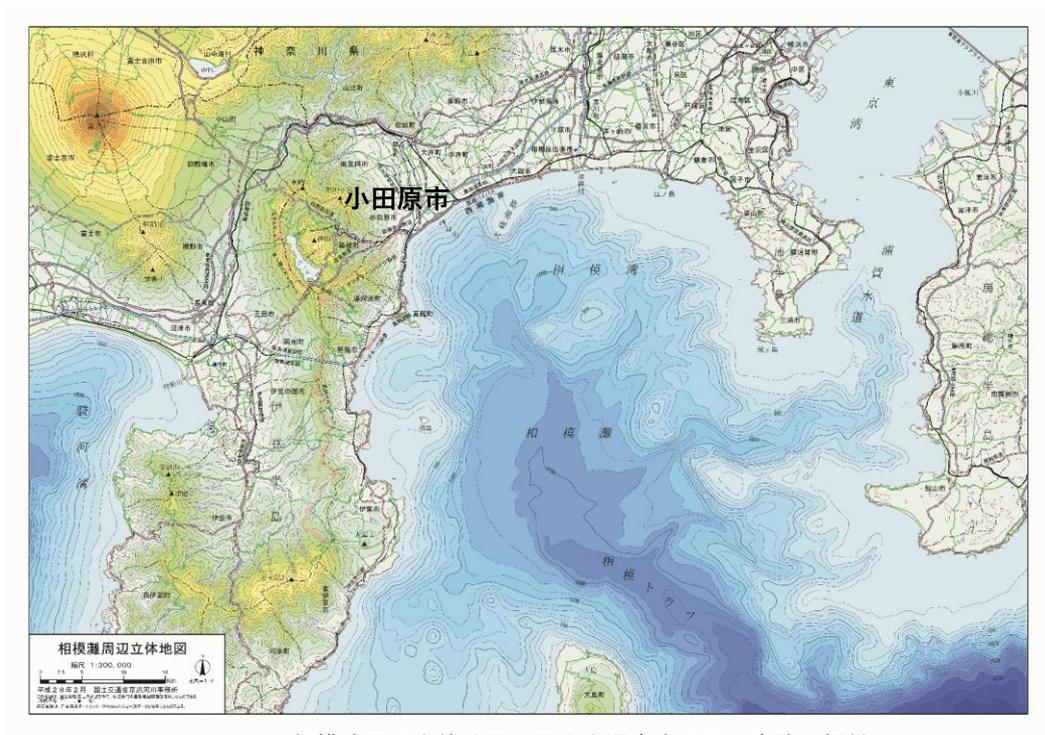
(4) 海底と海流

本市の南側に広がる相模湾^{さがみわん}の沿岸付近では、太平洋南岸を北東に進む黒潮（日本海流）の支流の一部が湾岸地形に沿って反時計回りに循環している。

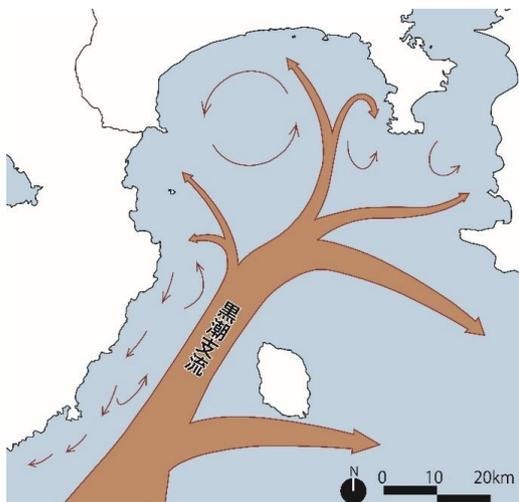
相模湾は、東半部では海岸線に沿って遠浅となっているが、西半部の本市付近においては海岸線から海底に向けて急傾斜が形成されており、深海が岸に迫る地形となっている。

この急傾斜は、海水に水温の高い表層と水温の低い深層の2層を創り出し、表層には黒潮（日本海流）によって暖流系の魚類が、深層には親潮（千島海流）によって寒流系の魚類が運ばれてくる。

さらに、箱根火山^{はこね}や丹沢山地^{かざん たんざわさんち}から河川を經由して栄養分豊かな陸水が流れ込んでおり、そうした条件のもとで、相模湾^{さがみわん}には多様な種類の魚が回遊している。



1-6 相模湾周辺立体地図（国土交通省京浜河川事務所提供）

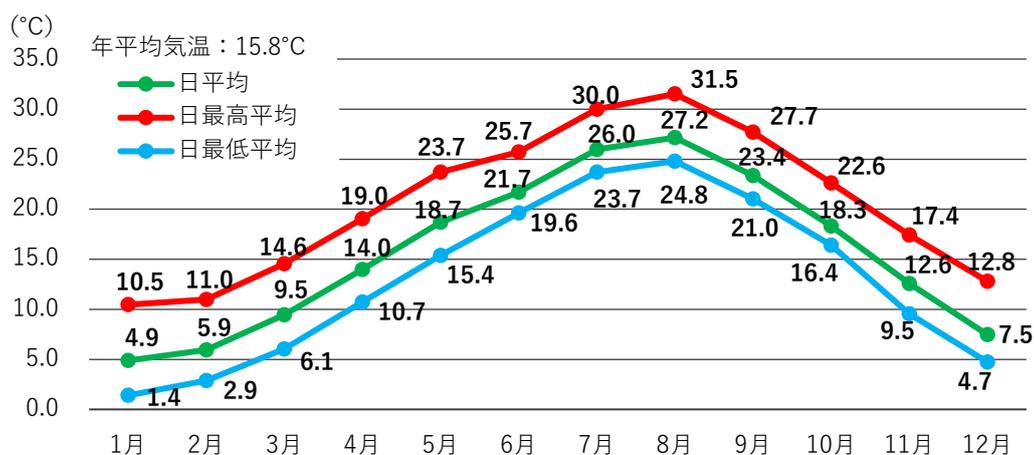


1-7 冬季相模湾の黒潮支流の流れ

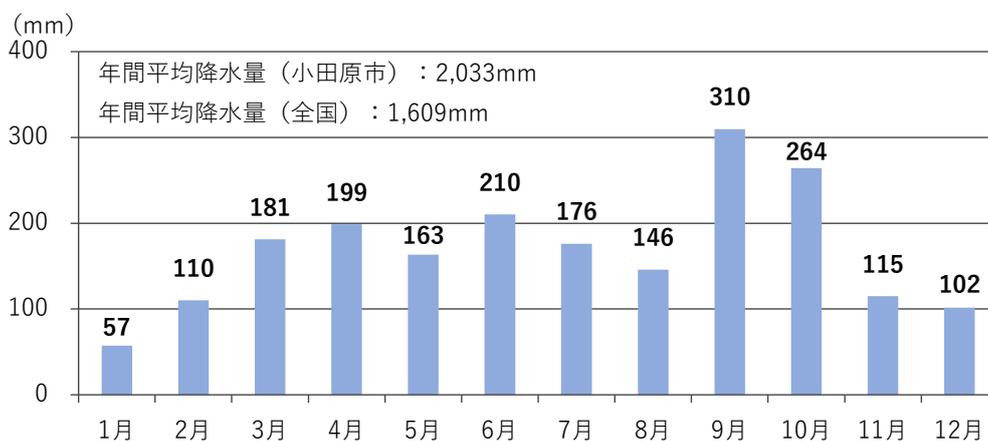
(5) 気象

本市の気温は、相模湾^{さがみわん}に流れ込む黒潮（日本海流）の影響を受け、年平均 15.8 度と比較的温暖で、夏は涼しく冬は暖かい気候となっている。また、2,000mm を超える年間平均降水量は、全国的にも多い方である。これには、南側に相模湾を臨み、東・北・西の三方を高い山や丘陵に囲まれている本市の地形が大きく影響している。

こうした温暖で湿潤な気候は、生活に快適さをもたらすだけでなく、丘陵部などにおける梅及びみかんなどの柑橘栽培^{かんきつ}、平野部における水稲栽培など、様々な農業生産を支える前提となっている。



1-8 小田原市の気温*1 (「気象庁ホームページ」を基に作成)



1-9 小田原市の降水量*2 (「気象庁ホームページ」を基に作成)

*1 過去 10 年間 (平成 22 年 (2010) ~令和元年 (2019)) の平均値

*2 小田原市の年間平均降水量は*1と同じ。全国の年間平均降水量は「2010 年平均値」における 47 地点の降水量 (昭和 56 年 (1981) ~平成 22 年 (2010)) の平均値

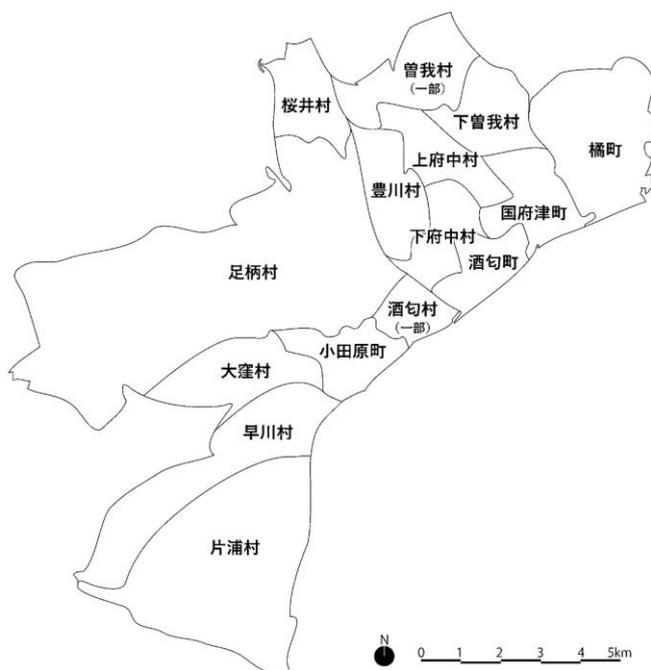
2 社会的環境

(1) 市の合併経緯*3

明治 22 年 (1889) の市制・町村制施行により、本市の前身となる小田原町をはじめ周辺の足柄村*4、大窪村、早川村、酒匂村に町村制が施行された。次いで、昭和 15 年 (1940) にはこれらが合併し、同時に市制を施行して本市が誕生する。その後も、周囲の町村との合併は進められ、昭和 46 年 (1971) の橋町との合併により、現在の市域が確定した。平成 12 年 (2000) には特例市へ移行している。

1-10 小田原市の合併経緯

明治 22 年 (1889)	昭和 15 年 (1940)	昭和 23 年 (1948)	昭和 25 年 (1950)	昭和 29 年 (1954) 7 月	昭和 29 年 (1954) 12 月	昭和 31 年 (1956)	昭和 46 年 (1971)
小田原町	小田原市	小田原市	小田原市	小田原市	小田原市	小田原市	小田原市
足柄村							
大窪村							
早川村							
酒匂村							
	下府中村	桜井村	豊川村	片浦村	小田原市	小田原市	小田原市
				下曾我村			
				酒匂町			
				国府津町			
				上府中村			
				曾我村		橋町	



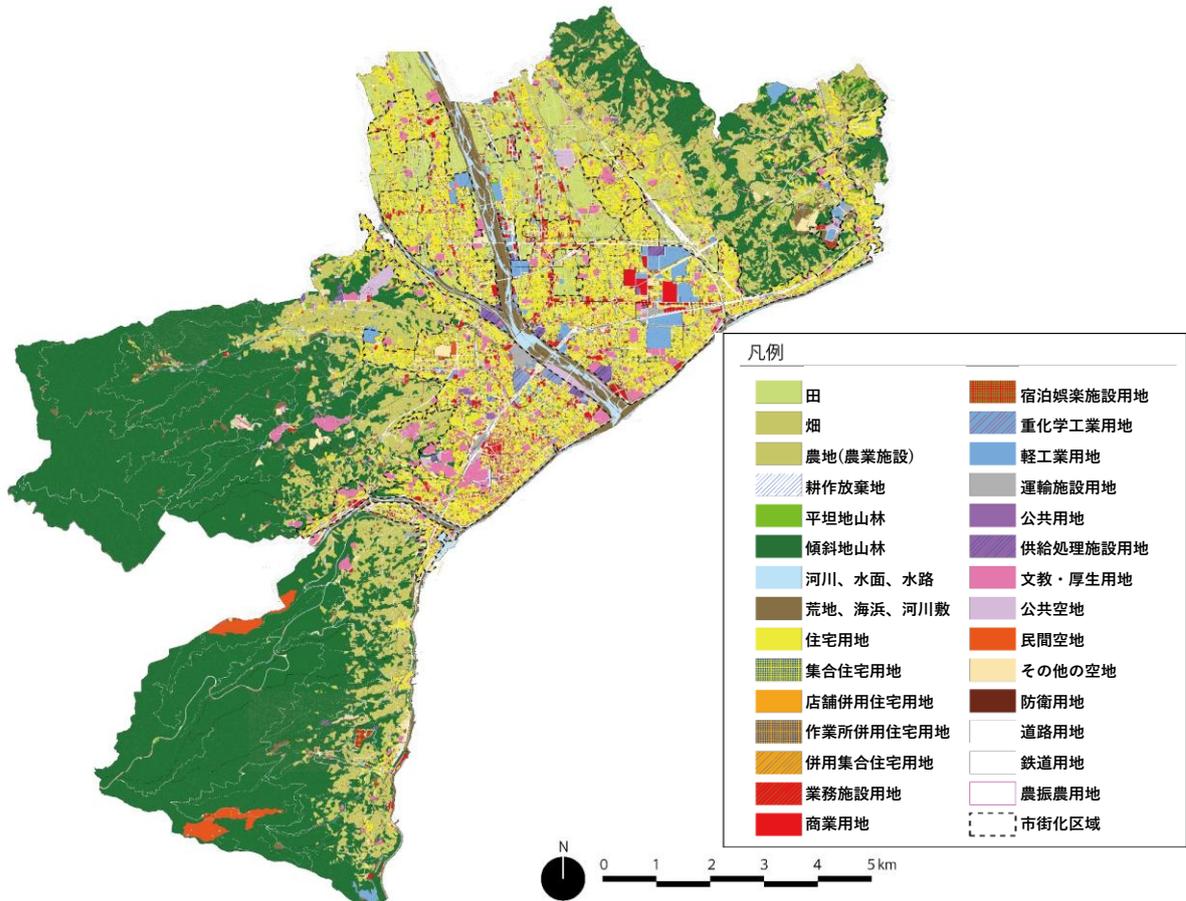
1-11 合併前の小田原周辺

*3 酒匂村、曾我村は村区域の一部が合併の対象

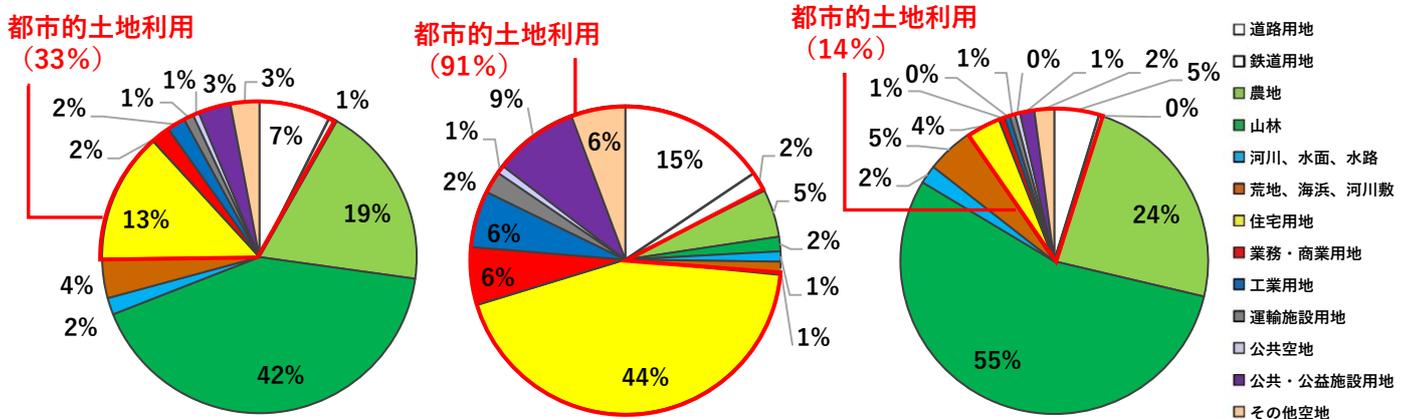
*4 昭和 15 年 (1940) に足柄町となった

(2) 土地利用

市域の東部に^{おおいききゅうりょう}大磯丘陵、西部に^{ほこねがいりんざん}箱根外輪山の東斜面が広がる本市では、市域全体の約4割が山林となっている。また、中央平野部の北部を中心に広がる農地は、市域全体の約2割を占める。住宅用地や業務・商業用地、工業用地等の都市的土地利用は、相模湾に近い^{あしがらへい や}足柄平野の南部を中心に広がっており、市街化区域の約9割を占めている。



1-12 土地利用現況図（「平成27年度神奈川県都市計画基礎調査」を基に作成）



*5 1-13 土地利用の構成
(市域全体)

*5 1-14 土地利用の構成
(市街化区域内)

*5 1-15 土地利用の構成
(市街化調整区域内)

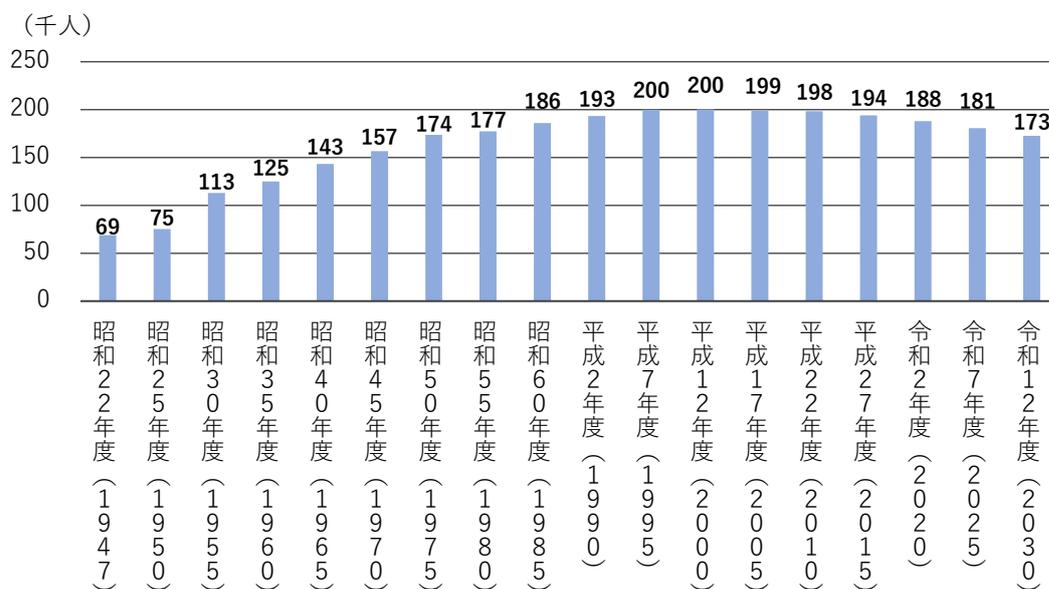
*5 1-13、1-14、1-15 は「平成27年度神奈川県都市計画基礎調査」を基に作成した

(3) 人口動態

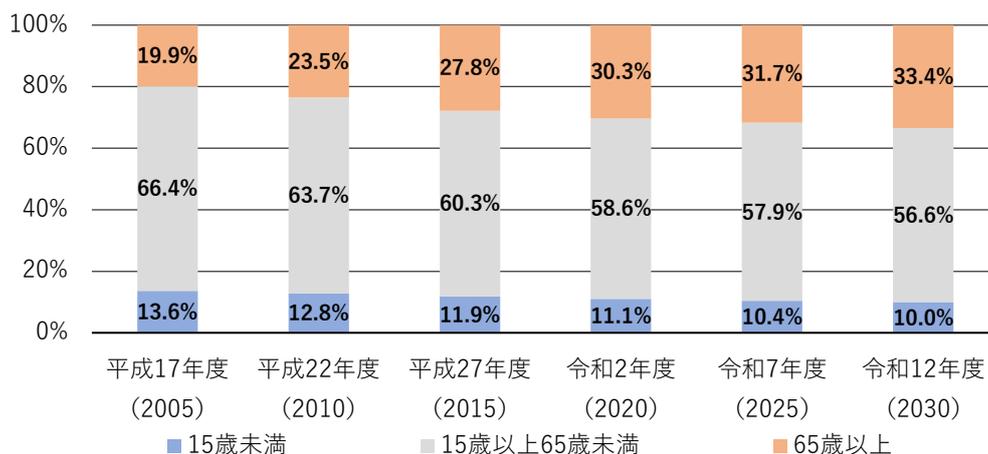
本市の人口は、昭和30年（1955）の国勢調査で約11万人であったが、年々増加し続け、平成7年（1995）の調査では、初めて20万人に達した。その後もわずかに増加傾向にあったが、平成12年（2000）をピークとして、以後は緩やかな減少傾向に転じている。

また、人口の年齢構成は、年少人口（0～14歳）と生産年齢人口（15～64歳）の割合が減少している一方、老年人口（65歳以上）の割合が急速に増加している。

国立社会保障・社会人口問題研究所の推計値によると、全国と同様に、今後も人口減少・少子高齢化が進展することが想定される。



*6 1-16 本市の総人口の推移



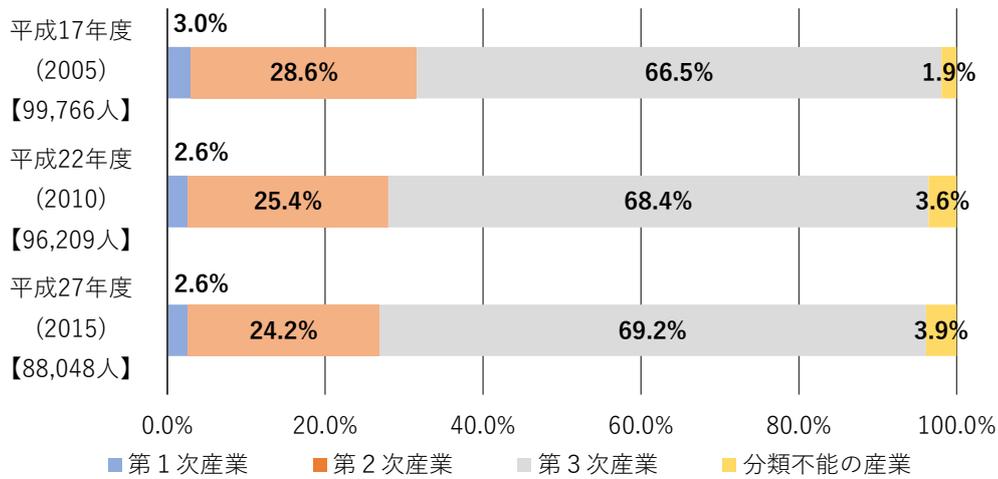
*6 1-17 年齢構成別の割合の推移

*6 1-16、1-17 「国勢調査」、「国立社会保障・社会人口問題研究所の推計値」（令和2年（2020）以降）を基に作成した

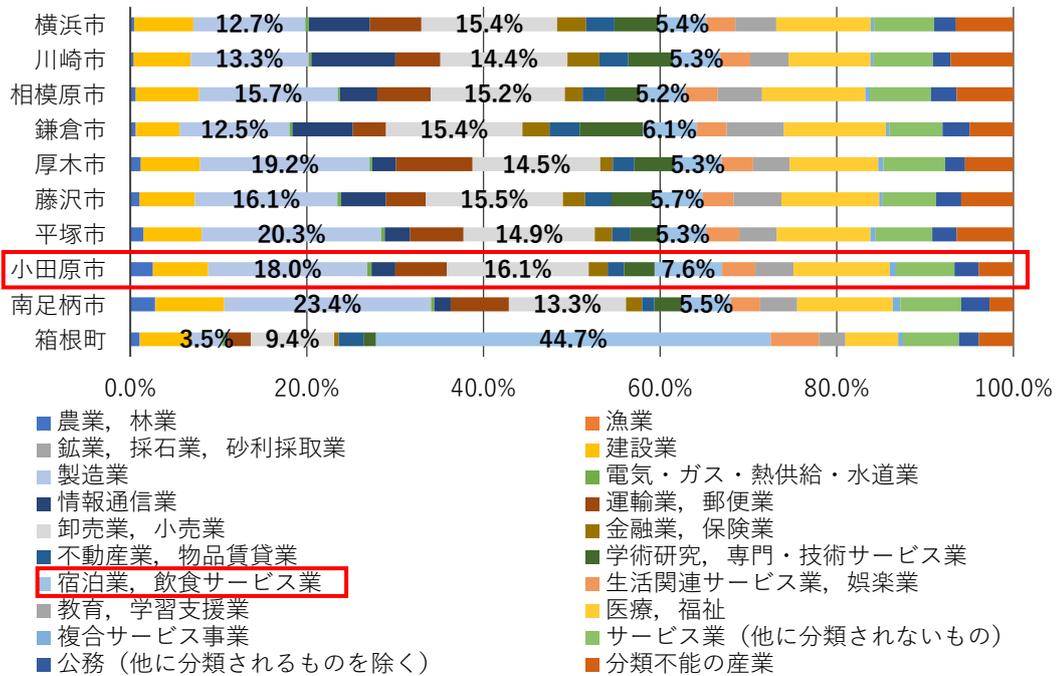
(5) 産業

「国勢調査」によると、平成17年度(2005)以降、本市の労働人口は減少傾向にある。産業別の割合では、第1次産業及び第2次産業の割合が減少し、第3次産業の割合が増加している。この傾向は、『小田原市歴史的風致維持向上計画(第1期)』の認定を受けた平成23年(2011)以降も変わらない状況である。

本市の産業種別の特徴として、県内他市町村に比べ、水産加工業や木工業などの伝統産業に類する製造業、宿泊業・飲食サービス業の割合が比較的高い点があげられる。



*7 1-19 産業形態別の労働人口の推移



*7 1-20 産業別労働人口の割合の推移

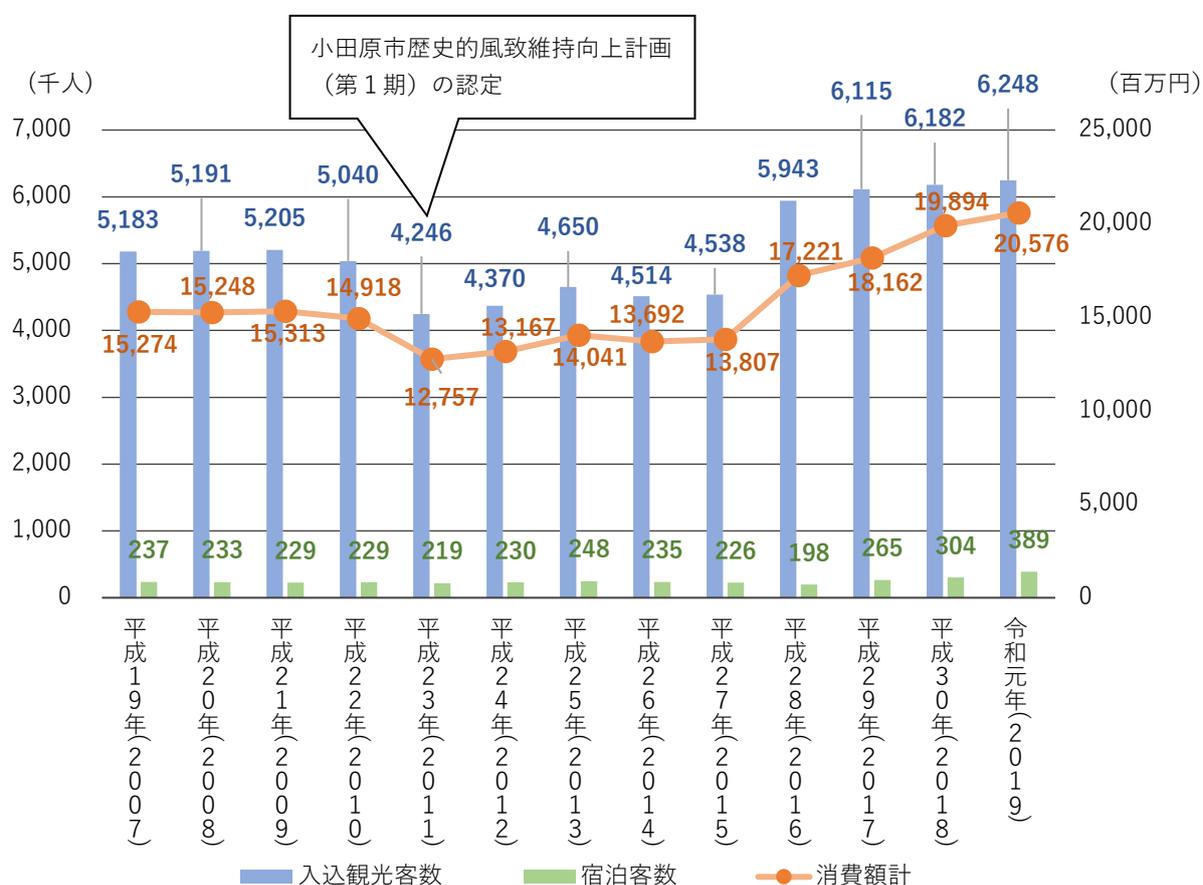
*7 1-19、1-20 は「国勢調査」を基に作成した

(6) 観光

本市の入込観光客数は、東日本大震災の影響を受けて平成23年(2011)に大きく減少したが、直後に『小田原市歴史的風致維持向上計画(第1期)』の認定を受け、小田原城天守閣のリニューアルやまち歩きなどの様々な取組により、平成28年(2016)以降は大きく増加している。

これに伴い、宿泊客数も増加しているが、市内に宿泊施設が少ないことや、箱根や伊豆といった宿泊施設の充実した市町と近接していることから、入込観光客数に占める宿泊者数の割合は依然として低い水準に留まっている。

また、観光に伴う消費額は、入込観光客数や宿泊客数の推移に合わせ、増加傾向となっている。



1-21 入込観光客数、宿泊客数、観光に伴う消費額の推移(「神奈川県入込観光客調査」を基に作成)

3 歴史的環境

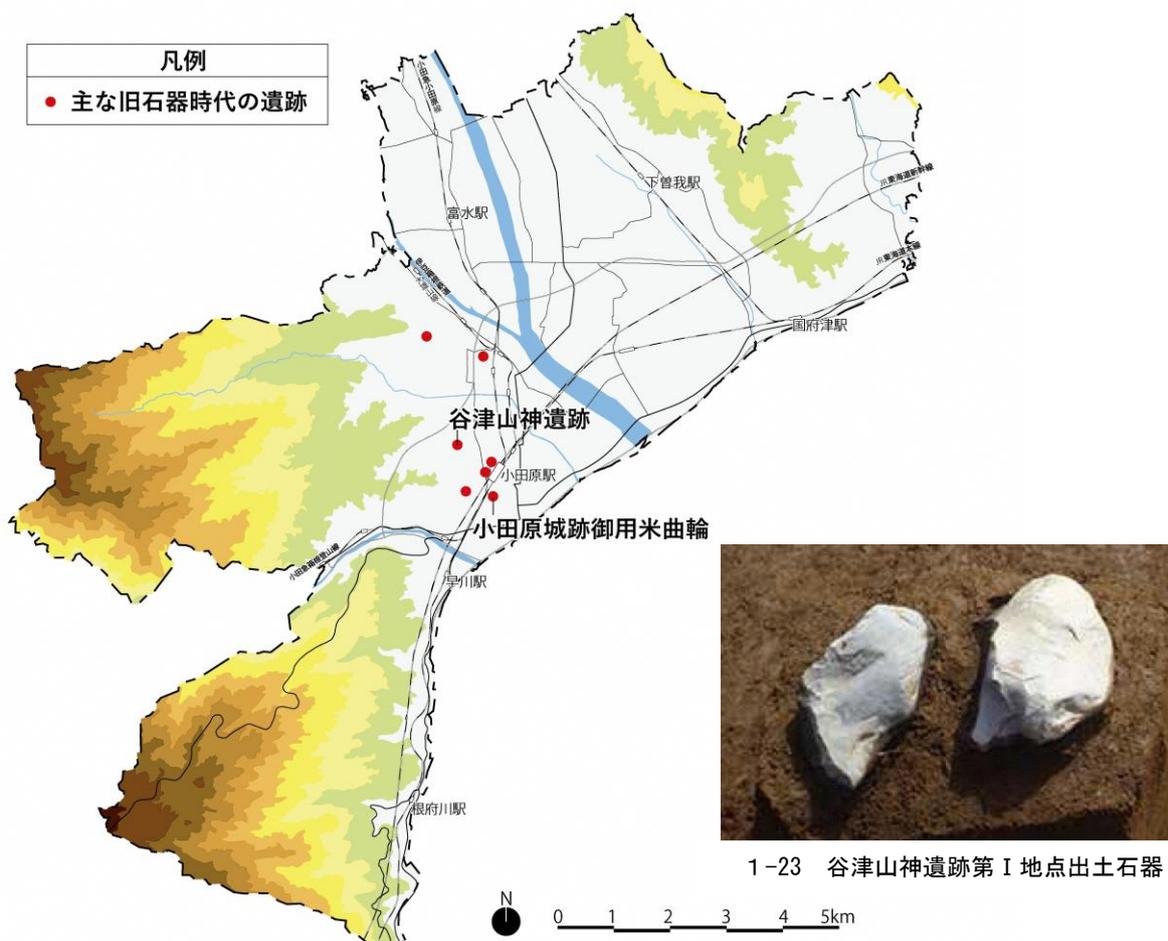
(1) 歴史

①原始、古代 ー小田原の形成ー

<旧石器時代>

本市域で確認されている最も古い遺跡は、旧石器時代のものである。イギリス人医師で考古学者でもあったN・G・マンローは、明治38年(1905)に早川及び酒匂川流域の段丘で採取した数点の遺物を、同41年(1908)に日本で初めて確認された旧石器時代の資料として学会に発表している。これは日本の考古学史に残る出来事となった。

このほか、市内では谷津山神遺跡で約18,000年前の旧石器末期の石器群がまとまって出土し、国指定の史跡である小田原城跡御用米曲輪でも20,000年前の石核が出土するなど、市内西部を中心に旧石器時代の遺物が確認されている。



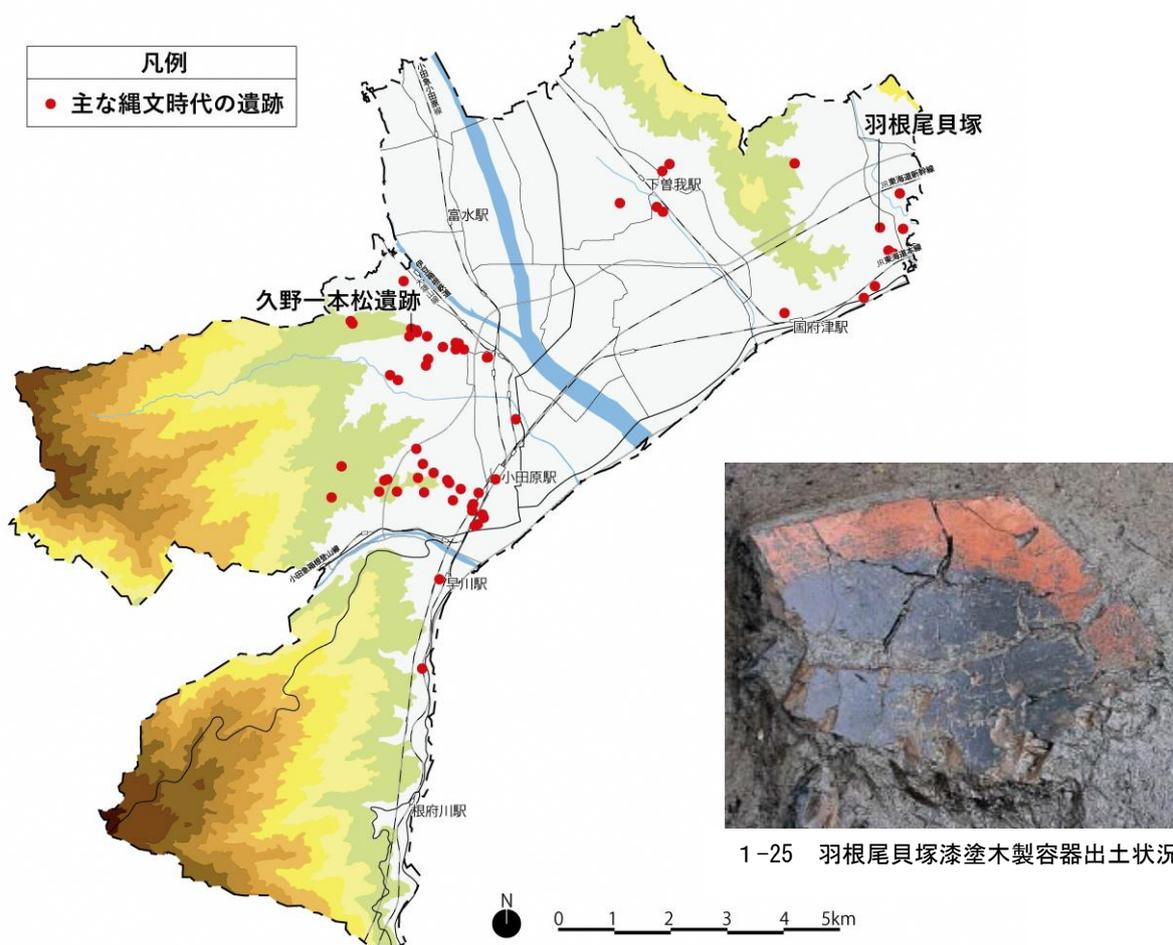
1-22 旧石器時代の遺跡分布

<縄文時代>

縄文時代の遺跡は、久野などの丘陵部を中心に多く確認されている。およそ5,500年前の縄文前期に形成された羽根尾貝塚は、貝塚の発掘例が少ない相模川以西で発見され

た3例目の貝塚である。ここでは、関東地方南部の土器に加え、中部地方・東海地方・関西地方で生産された土器なども出土しており、これらの地域との間で広域的な交流が行われていたことが想定されている。また、骨角製の髪飾りや釣針、漆塗りの木製容器や土器、木製の櫂や弓、獣骨や魚骨、クルミなど、当時の生活の痕跡を生々しく伝える遺物も確認されている。特に、黒と赤で彩色された漆塗木製容器は、縄文人の美意識や技術の高さを示すものであり、これらを含む羽根尾貝塚の出土資料は県指定の重要文化財となっている。

縄文中期になると、久野一本松遺跡で66基の竪穴住居跡が確認されるなど、丘陵上の大規模な集落を舞台に人々の活発な活動が行われていた様子が想定できる。縄文時代の遺跡は、ほかにも荻窪・水之尾・早川・根府川などの市内西部や曾我や千代などの市内東部の丘陵上で確認されている。



1-24 縄文時代の遺跡分布

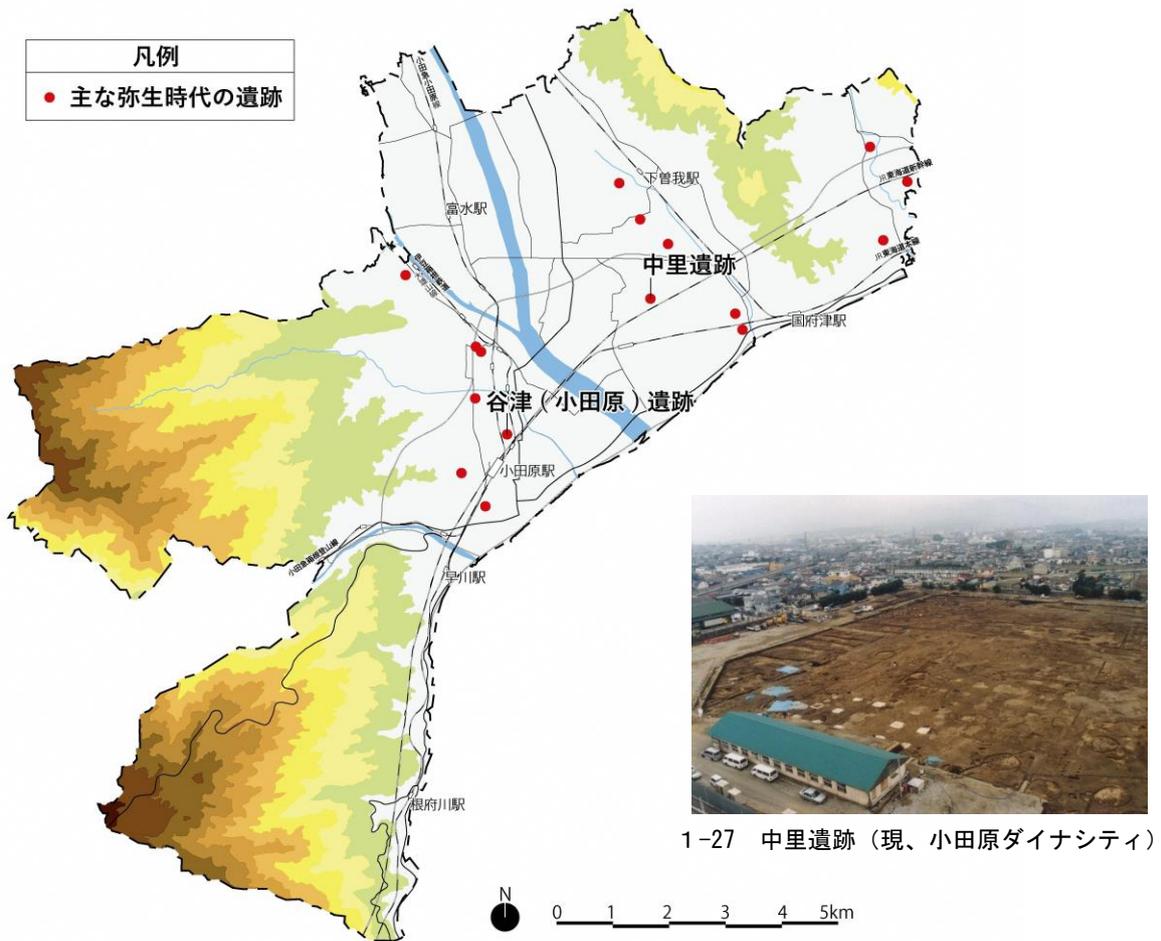
<弥生時代>

弥生時代の遺跡のうち谷津（小田原）遺跡は、かつて南関東地方の土器編年の骨格を担った小田原式と呼ばれる土器が出土した標識遺跡であり、全国的にその名を知られてい

る。

また、^{なかざといせき}中里遺跡は関東地方における最古の本格的な弥生集落とされており、本市を代表する遺跡の1つとなっている。^{なかざといせき}中里遺跡では、瀬戸内地方から東海地方にかけての地域で生産された土器が一定量出土していることから、その住人は当該方面の弥生文化との交流があったと考えられている。

弥生時代の遺跡は、このほか、^{くのたこ}久野・^{たかた}多古・^{ちよながつか}高田・^{ちよ}千代・^{ながつか}永塚・^{ほねお}羽根尾などの各所で確認されている。



1-26 弥生時代の遺跡分布

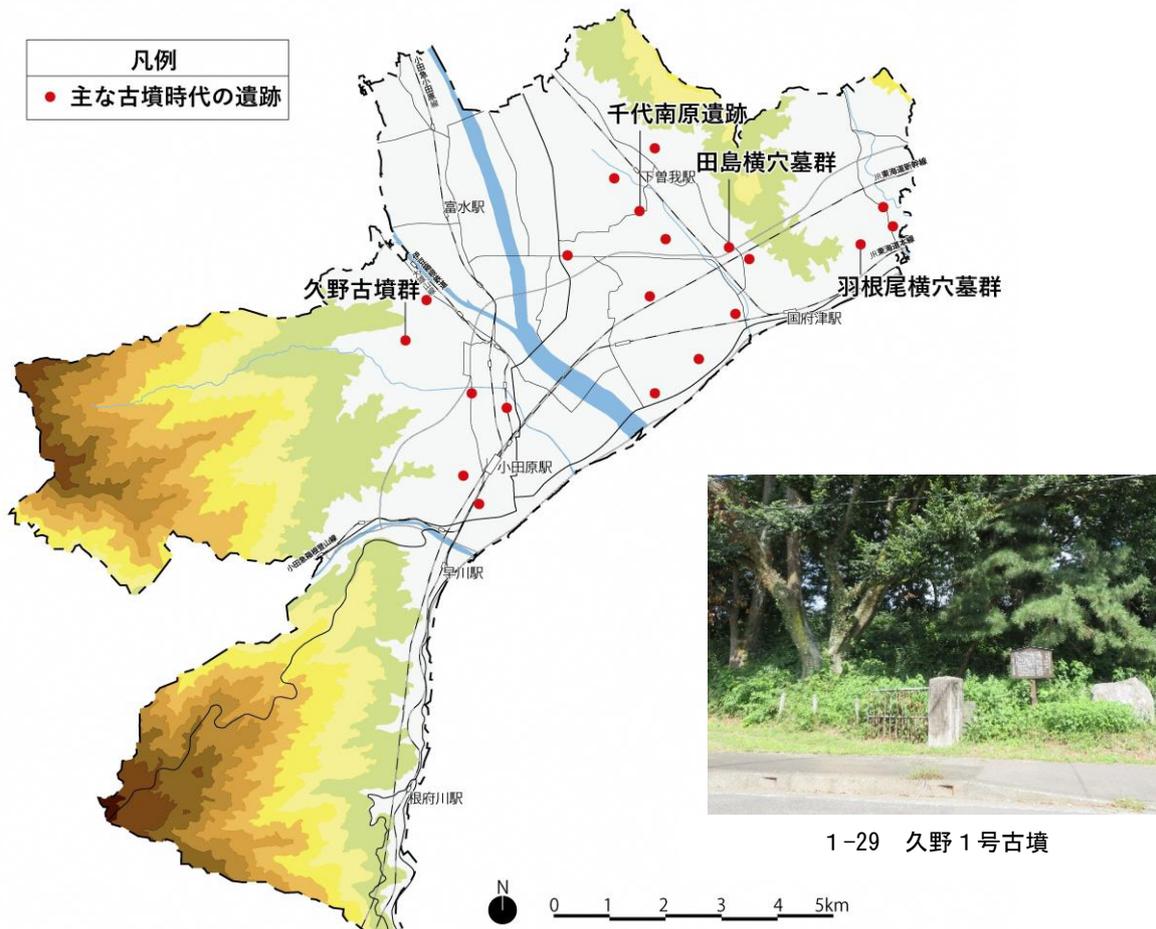
<古墳時代>

古墳前期には、^{ちよながつかたかた}千代・永塚・高田などの低位丘陵上や国府津などに集落が展開していた様子が確認されている。^{ちよみなみぼらいせき}千代南原遺跡では鍛冶関連遺物が出土しており、有力者の存在も想定できる。

古墳後期においても、^{ちよながつかたかたこうづ}千代・永塚・高田・国府津などに集落が存在していたが、加えて^{くのきゅうりょう}久野丘陵上に古墳群の形成が確認されている。^{くのきゅうりょう}久野丘陵上の古墳については、かつて^{くのひやくづか}久野百塚や^{くのつくもづか}久野九十九塚とも呼ばれ、120基以上の古墳が存在していたものと想定され

ている。中でも、市指定の史跡である久野1号古墳は、墳丘の直径39m、高さ5.9mに及んでおり、神奈川県内では最大級の円墳である。

このほか、国府津や小八幡の低地部などで複数の円墳の痕跡が確認されており、田島や羽根尾などの大磯丘陵には横穴墓と呼ばれる古墳が分布している。

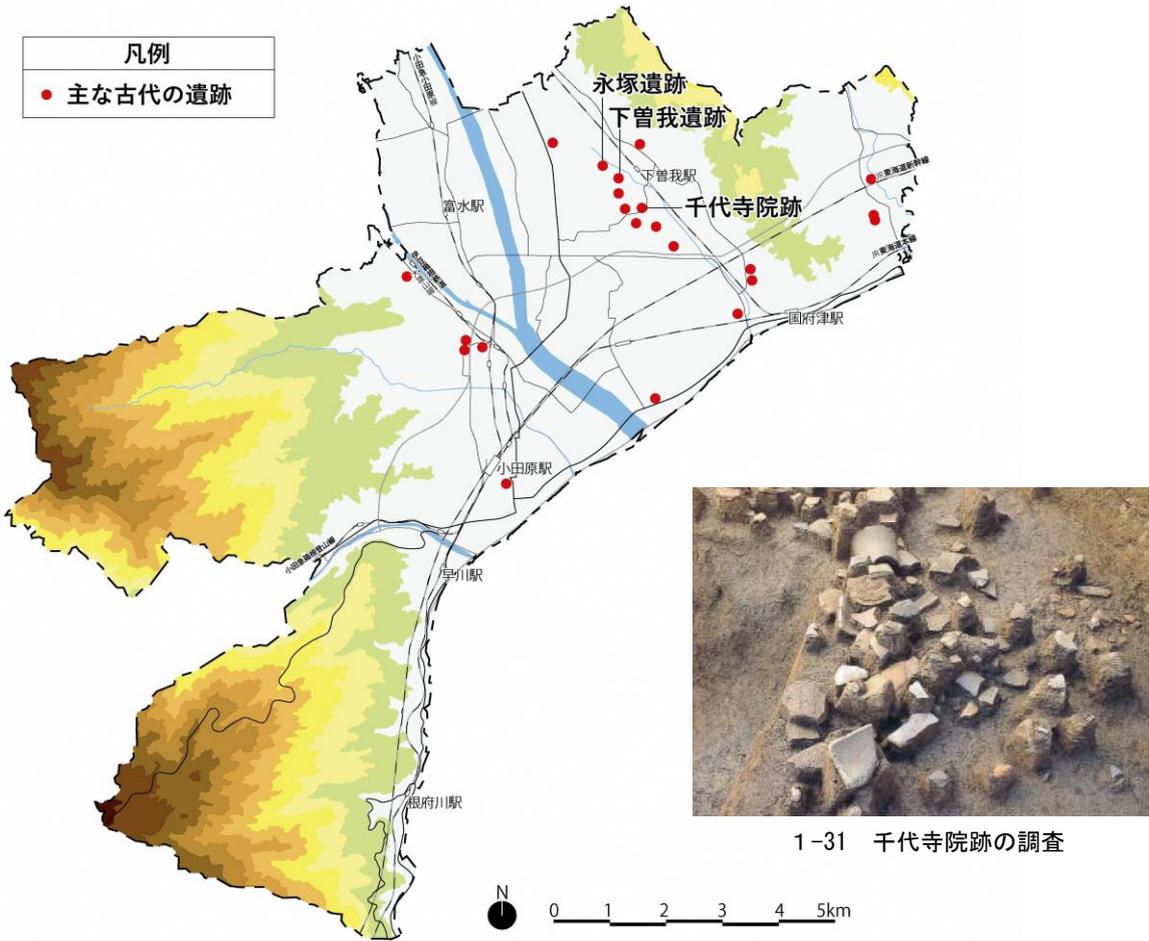


1-28 古墳時代の遺跡分布

<古代（奈良、平安時代）>

古代において、市域の大半は相模国足下郡に属しており、一部は足上郡、余綾郡にも及んでいた。多くの遺跡が確認されているが、最も顕著に遺跡が展開しているのは、永塚・千代・高田という低位段丘上である。

永塚遺跡及び下曾我遺跡では、多くの墨書土器が出土し、舗装道路の跡や格式の高い井戸が確認されていることから、この辺りに足下郡の役所である郡家が存在したのではないかと考えられている。また、千代には千代寺院跡（千代廃寺）と呼んでいる寺院が存在した。その想定域からは、埴仏（粘土板に浮彫した仏像）や螺髪などの仏教関連遺物、瓦が出土しており、建造物の土台となる版築基壇なども確認されている。



1-30 古代の遺跡分布

②中世 —小田原の発展—

＜鎌倉期の小田原＞

平安末期、平清盛が武家として初めて太政大臣の位に登り隆盛を極めると、朝廷や源氏を中心とする武士の間に不満が広まった。治承4年(1180)には源頼朝が配流先の伊豆国で挙兵するが、平家方の大庭景親らと市域南部の早川及び石橋山周辺での合戦に敗れて真鶴より安房国に逃れた。この石橋山合戦では佐奈田与一義忠とその家臣陶山文三が討死しており、2人を祀った与一塚と文三堂は、現在県指定の史跡となっている。

その後ほどなく平家を滅ぼし、鎌倉に幕府を開いた頼朝は、箱根と伊豆山の両権現への二所参詣の途中でしばしばこの地を訪れ、涙を流したという(「吾妻鏡」)。

中村氏・土肥氏・小早川氏・大友氏ら市域に本拠をもつ武士の多くは、頼朝の御家人となり、鎌倉幕府を支えた。その中には、大友氏(のち戦国大名)、小早川氏(のち戦国大名毛利氏の重臣)のように、蒙古襲来に備えて、承久の乱後、西国で獲得した所領に拠点を移したものもいる。

鎌倉時代の市域においてもっとも繁栄していたとみられるのは酒匂である。ここには鎌倉幕府が設置した浜部御所があったことが知られており、「金槐和歌集」には、3代将

軍源実朝がここで詠んだ歌も掲載されている。

一方で、鎌倉時代の遺跡は、酒匂北川端遺跡や酒匂北中宿遺跡、高田北之前遺跡や国府津三ツ俣遺跡、小八幡酒匂境遺跡などで確認されている。他では、早川の紀伊神社に社殿下で出土したという12世紀末～13世紀初頭の中国製青白磁小壺・常滑壺・渥美壺が伝わっているほか、酒匂の大見寺所在の徳治3年(1308)銘の宝篋印塔を最古とする造物が散見されている。

<南北朝期の小田原>

東海道は、もともと足柄峠を経由していたが、13世紀半ば頃から箱根峠を越えるルートが本道となった。鎌倉幕府将軍の二所参詣などにより交通量が増加したためである。これに伴い、小田原はこのルートに沿った宿駅として、13世紀末頃に成立したと考えられる。史料上で地名が初めて確認されるのは、鎌倉末期の14世紀初頭のことであり、その位置は、松原神社の門前、戦国時代に宮前と呼ばれる区画の周辺であったと考えられている。

南北朝期になると、「太平記」の記述に、鎌倉から逃れた畠山国清以下300余騎が小田原宿に寄宿したとあることから、この頃には宿駅として相当規模の発展を見せていたことがうかがえる。時を同じくして、史料上に登場する小田原の所見数が酒匂を凌駕するようになる。

この時期の遺跡としては、御組長屋遺跡で14世紀代の井戸が検出されている。石塔では、相模型と呼ばれる特徴的な安山岩製板碑があり、このうち、国府津の宝金剛寺の1基、南町の居神神社の2基が市指定の文化財となっている。また、御用米曲輪で2基が出土しており、東京国立博物館に小田原で出土した1基が所蔵されている。

<室町期の小田原>

室町幕府の成立後、関東では応永23年(1416)の上杉禅秀の乱、永享の乱(永享10年(1438))、結城合戦(永享12年(1440))、享徳の乱(享徳3年(1454)～文明14年(1483))、長享の乱(長享元年(1487)～永正2年(1505))と内乱が続く。

この間、小田原には、上杉禅秀の乱の戦功によって大森氏が進出してきていた。その後、享徳の乱の勃発後に大森氏が小田原城を築城したとする史料があり、これが史料上の小田原城の初見である(「鎌倉大草紙」)。

この時期の遺跡は、高田南原遺跡や小田原城が位置する丘陵先端部を中心に散見されている。ただし、いまだ明確な大森氏時代の小田原城の痕跡は確認されておらず、考古学的には北条氏登場以前の小田原城の様相は不明である。

<戦国期の小田原>

明応5年(1496)から文亀元年(1501)までの間に、当時伊豆の^{にらやまじょう}韮山城(静岡県伊豆の国市)を拠点としていた伊勢宗瑞^{いせ そうずい}が大森氏^{おおもり}に代わって小田原城に進出する。宗瑞は、その後も韮山に在城し、小田原城にはやがて嫡子氏綱^{うじつな}を置いたと考えられている。永正15年(1518)に家督を継いだ2代氏綱^{うじつな}は小田原城を本拠とし、大永3年(1523)には苗字を伊勢姓から鎌倉幕府の執権北条氏^{ほうじょう}と同じ北条^{ほうじょう}姓に改めた。

その後、3代氏康^{うじやす}と4代氏政^{うじまさ}は関東に勢力を拡大し、5代氏直^{うじなお}の時代には下野国^{しもつけのくに}や常陸国^{ひたちのくに}まで領地を広げた。本能寺の変(天正10年(1582))後には、一時的ながら、織田領であった信濃国^{しなののくに}と甲斐国^{かいのくに}へも進んでいる(天正・壬午の乱)。その後、北条氏^{ほうじょう}は徳川家康^{とくがわ いえやす}と和睦し同盟を結ぶが、家康^{いえやす}と対立する豊臣秀吉^{とよとみひでよし}と、北条氏^{ほうじょう}と敵対する北関東諸勢力^{とよとみひでよし}とが結びついたため、豊臣秀吉^{とよとみひでよし}との対立関係は複雑なものとなった。



1-32 石垣山一夜城

その結果、天正18年(1590)に豊臣秀吉^{とよとみひでよし}は22万の軍勢を率い関東へと出兵して、4月上旬に小田原城を包囲し、6月には石垣山^{いしがきやま}に本営として石垣造りの城を造営した。

これに対し、氏政^{うじまさ}と氏直^{うじなお}は小田原城に籠城して抗戦したが、次々に領内の支城を攻略され、7月5日に氏直^{うじなお}が投降して小田原城は開城した(小田原合戦)。

小田原合戦終戦後、4代氏政^{うじまさ}と弟の氏照^{うじてる}は開戦の責任を取らされて切腹を命じられたが、氏直^{うじなお}は一命を助けられて高野山^{こうやさん}へ追放となった。代わって、小田原城には旧北条領^{ほうじょう}を与えられた徳川家康^{とくがわ いえやす}の重臣大久保忠世^{おおくぼただよ}が入ることとなる。

氏直^{うじなお}は翌天正19年(1591)に許されて1万石の豊臣大名^{とよとみ}として再起するが、同年^{ほうそう}痲瘡により病没し、北条氏^{ほうじょう}の家督^{うじまさ}は氏政^{うじなお}の弟で氏直^{うじなお}の叔父にあたる氏規^{うじのり}の子氏盛^{うじもり}が継いだ。その子孫は、河内狭山藩(現、大阪狭山市)の藩主として明治維新まで存続した。

③戦国時代の小田原城と城下町

<歴代城主と小田原城の発展>

小田原を本拠と定めた氏綱は、積極的に小田原の都市整備を始めていたと考えられる。「東国紀行」の記述から、天文14年（1545）には小田原城下に防火・生活用水を供給するための小田原用水（早川上水とも呼ばれる）の存在が確認できるが、それは氏綱が天文10年（1541）に死去した直後のことであり、この小田原用水も、氏綱の時代に敷設された可能性が高い。

氏康の時代、京都南禅寺の僧東嶺智旺は、天文20年（1551）に小田原を訪れ、「町小路数万間、地一塵無し。東南は海なり。海水小田原の麓を遶るなり。太守の壘、喬木森々、高館巨麗、三方に大池有り。池水湛々、浅深量るべからざるなり。」と、小田原の景観について記している。町小路数万間とは計画的に整備された小田原城下の景観を示している可能性があり、発掘調査成果からは16世紀代の小田原には正方位を基準としたまち割りが施工された範囲があったことも確認されている。また、三方の大池は二の丸堀の原型を指すと考えられることから、この時点の小田原城域は二の丸の内側であったことがわかる。

氏政の時代になると、永禄4年（1561）に長尾景虎（上杉謙信）、永禄12年（1569）には武田信玄に相次いで攻め込まれた経験から、小田原城の拡張工事に着手したと考えられている。「岡本氏古文書写」によると、氏政は城郭普請に対して几帳面に注文を付けている様子が見受けられ、発掘調査においても氏政時代の城郭遺構は直線的で角度の整ったものである事例が多い。天正15年（1587）までには丘陵部の（三の丸）新堀が普請され、この時期にも小田原城の整備拡張が積極的に行われていたものと思われる。

天正12年（1584）頃から豊臣秀吉との対立関係が明確になると、氏政と氏直は、天正15年（1587）より、「相府大普請」と呼ばれる普請工事を開始し、城下をも取り込んだ堀と土塁からなる周囲約9kmの総構を造営した。これにより、小田原城は中世最大級の城郭といわれる規模となった。この総構は、天正18年（1590）の小田原攻めの際に防御力を発揮したことから、後に豊臣秀吉が京に御土居を構築するなど、全国の城郭にも影響を与えた。

小田原合戦では、小田原城は3か月の籠城戦の末、落城することなく開城する。そのため、その後も北条時代の小田原城は健在であった。天正19年（1591）に上洛した伊達政宗は、小田原城を巡見して「驚嘆スベキ事ノミナリ」と北条時代の小田原城の威容に驚いている（「貞山公治家記録」）。一方で、「外郎家文書」には、新しく小田原城主となった大久保忠世が小田原城の修築工事に着手している様子が確認できるものがあり、政宗が見た小田原城の姿は忠世の改修が加えられた後のものであったかもしれない。

いずれにせよ、これ以降も戦国時代の小田原城は、寛永10年(1633)の寛永小田原大地震で壊滅的な被害を受けるまで、改修の手が加えられながら利用されていった。

<戦国期の城下町の特徴>

箱根越えの東海道の宿駅として成立し発展してきた小田原は、氏綱による都市整備および小田原城の拡張とともに城下町としての性格を併せ持つようになった。当初、その中心は、松原神社門前まつばらじんじゃ一帯の宮前みやのまえと箱根口周辺の今宿いまじくを含む、松原神社と居神神社いがみじんじゃの間の東海道沿いにあったと考えられ、甲州道沿いの開発は、氏綱により天文元年(1532)から天文9年(1540)まで実施された鶴岡八幡宮造営工事に参加した銀師須藤氏つるがおかはちまんぐうが江戸時代に須藤町すとうちようと呼ばれた甲州道沿いの一画に居住している様子を見ると、後発であったと考えることができる。

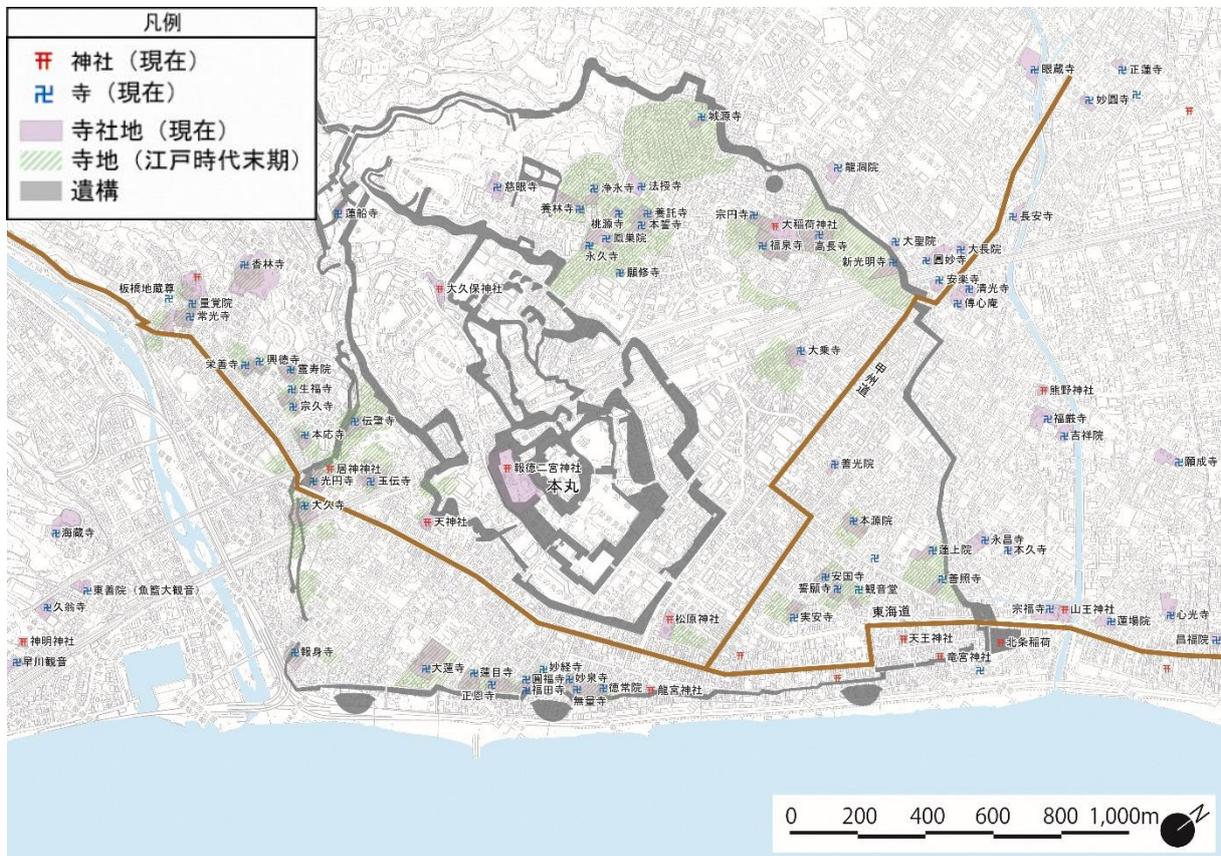
その後、永禄9年(1566)に三浦三崎に漂着した唐人が宮前の北寄りの一画に居住し、江戸時代に唐人町とうじんちようと呼ばれる街区が形成された。また永禄12年(1569)までには宮前の東方しんしくに新宿が成立していることが確認される(「相州文書」)。新宿は新出の宿を指す呼称であるから、およそ小田原城下は東海道沿いから甲州道沿いへと展開し、そしてさらに東海道の東側へと拡張していったものと考えられる。そして、総構そうがまえが付設されると、その内側の城と城下町は府内ふないと呼ばれるようになる。

町の居住者としては、宮前に商人問屋、今宿に薬種商、新宿に鋳物師らの存在が確認される。また宮前の南側の海沿いには船方村ふなかつむらと呼ばれた漁師村があり、今宿西方の総構外そうがまえの東海道沿いに位置する大窪には石切(石工)や紺屋などの職能民が居住していたことが知られている。武家居住地で確実な場所はないが、各所の発掘調査で堀が確認されていることから、堀で囲郭された屋敷地が点在していた可能性がある。近世以降に町名として残る山角町やまかくちようには山角氏、上幸田うわこうだ・下幸田したこうだ・藪幸田やぶこうだには幸田氏、安斎小路あんさいこうじには田村安斎たむらあんさい、狩野殿小路かのどのこうじには狩野氏の屋敷があり、また広浜ひろはまに北条水軍ほうじようの梶原氏かじわら、御花畑おはなばたけに松田氏まつだ、大蓮寺だいれんじの東隣りでんじようじ(旧伝肇寺)付近ほうじよううじてるに北条氏照の屋敷があったと伝わっている。

このように、この時期は近世城下町とは異なり、武家地や寺社、職能民などが集中する様相ではなく、各所に点在して居住するような様相であったことがわかる。



1-33 戦国時代の小田原城とその城下のイメージ



1-34 神社仏閣の配置と総構の関係

＜小田原用水の整備＞

早川を水源とし、小田原のまちなかを流れる小田原用水は、日本最古の上水道とも言われている。

いつ頃敷設されたものかを示す史料はないが、天文14年(1545)に小田原に立ち寄った連歌師宗牧の紀行文「東国紀行」には、北条氏康の館に引かれた水源は、箱根の水海だと聞いて驚いたとの記述がある。箱根の水海は芦ノ湖であり、それは早川からの取水を意味すると考えられるので、この時期までには小田原用水が敷設されていたと考えられている。

いずれにしても、天正18年(1590)に豊臣秀吉が小田原に攻め寄せた際に作成されたとされる「小田原陣仕寄陣取図」(山口県文書館蔵)の1枚には、早川より分かれ、総構の中を東海道に沿って流れる川がみられ、これが小田原用水を描写しているものと考えられるため、北条時代より存在していたことは

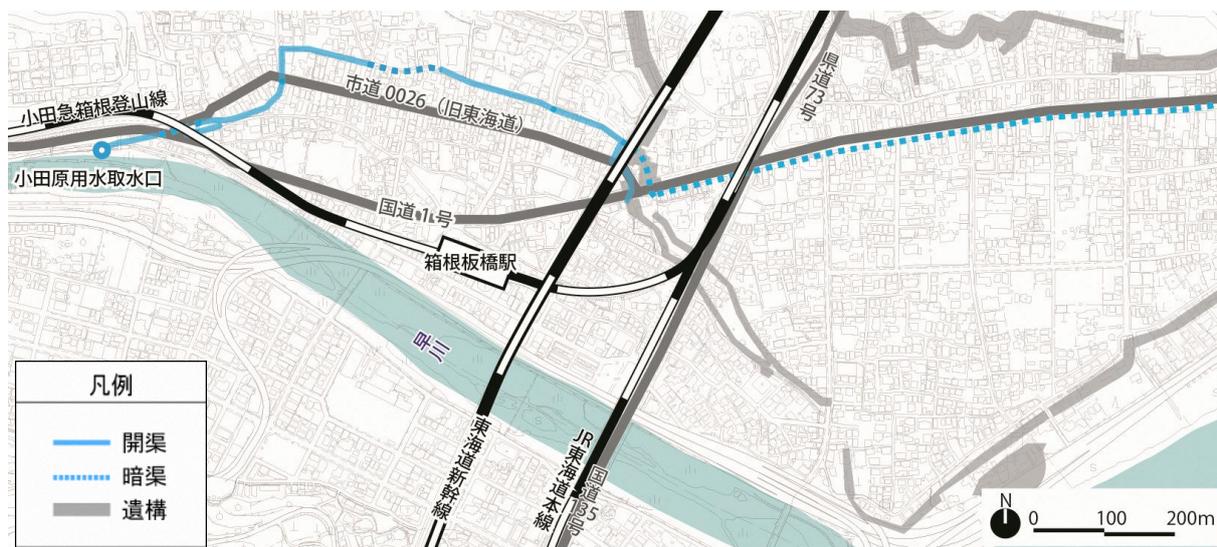
確実である。



1-35 小田原用水



1-36 小田原用水取水口



1-37 現存する小田原用水位置図(令和3年(2021)3月現在)

④近世 一宿場町としての繁栄一

<近世の小田原城>

小田原合戦終了後、北条氏に代わって関東地方を領したのは徳川家康である。これに伴って江戸の西を守る拠点として位置づけられた小田原城には、家康の重臣大久保忠世が4万5千石で入城した。しかし、その子忠隣は慶長19年(1614)に改易されて近江国に配流となる。この時の改易に際し、史料上では小田原城の本城(本丸)以外はことごとく破却されたと記されるが、その後も総構などの戦国時代以来の城郭遺構は温存されている。元蔵堀の発掘調査で部分的に土塁を崩している様子が確認されていることから、破却は局部的なものであったと考えられる。

大久保氏改易後は、特定の城主は置かれず、幕府城番*8が小田原城を管理した。この時期には、大坂に豊臣氏が健在であるため、臨時的な措置であったとも考えられる。その後、元和5年(1619)に阿部正次が上総国大多喜より5万石で小田原へと入るが、元和9年(1623)には武蔵国岩付へと転封となり、再び小田原城は城番が置かれた。この時には、2代将軍徳川秀忠が小田原城に隠居するとの計画もあり、小田原城と城下の整備が計画されている。しかし、それは秀忠の死去により取りやめとなり、寛永9年(1632)に稲葉正勝が下野国真岡より8万5千石で小田原城へと入った。

稲葉正勝は、3代将軍徳川家光の乳母春日局の実子で、家光の側近であり出世頭であった。入封して間もなく正勝は、小田原城の改修工事に着手する。おりしも翌年1月には寛永小田原大地震が発災し、小田原城と城下は壊滅的な被害を受けるが、既に、翌寛永11年(1634)に上洛する徳川家光が宿泊することが決まっていたため、幕府の援助を受けて復旧工事が進められた。その後、工事は延宝3年(1675)に完了し、この時に小田原城は現在みられるような石垣と白亜の天守を備えた近世城郭として生まれ変わる。

稲葉氏が3代で越後国高田へと転封すると、貞享3年(1686)に大久保忠朝が下野国佐倉から10万3千石で入封する。大久保氏復帰後は度重なる災害に相次いで見舞われる中で、小田原城の目立った改修は確認されないが、嘉永5年(1852)に外国船防備のため、海岸に3基の台場を築造されている。

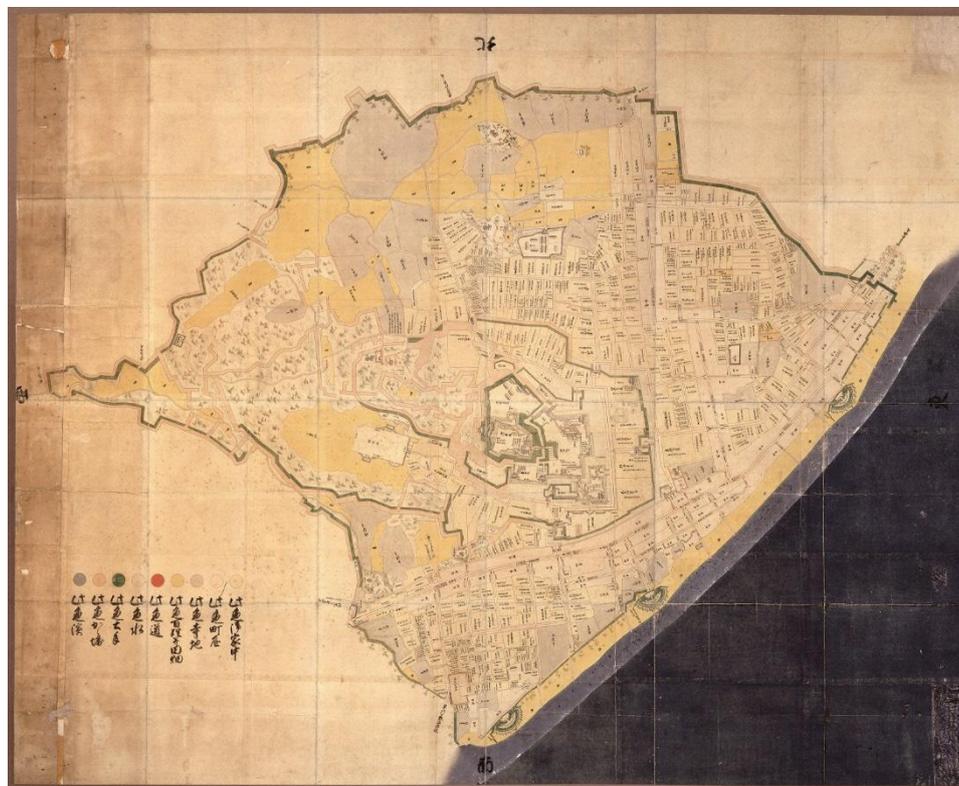
*8 交替で城や領地の支配を任される役目のこと

<近世の城下町>

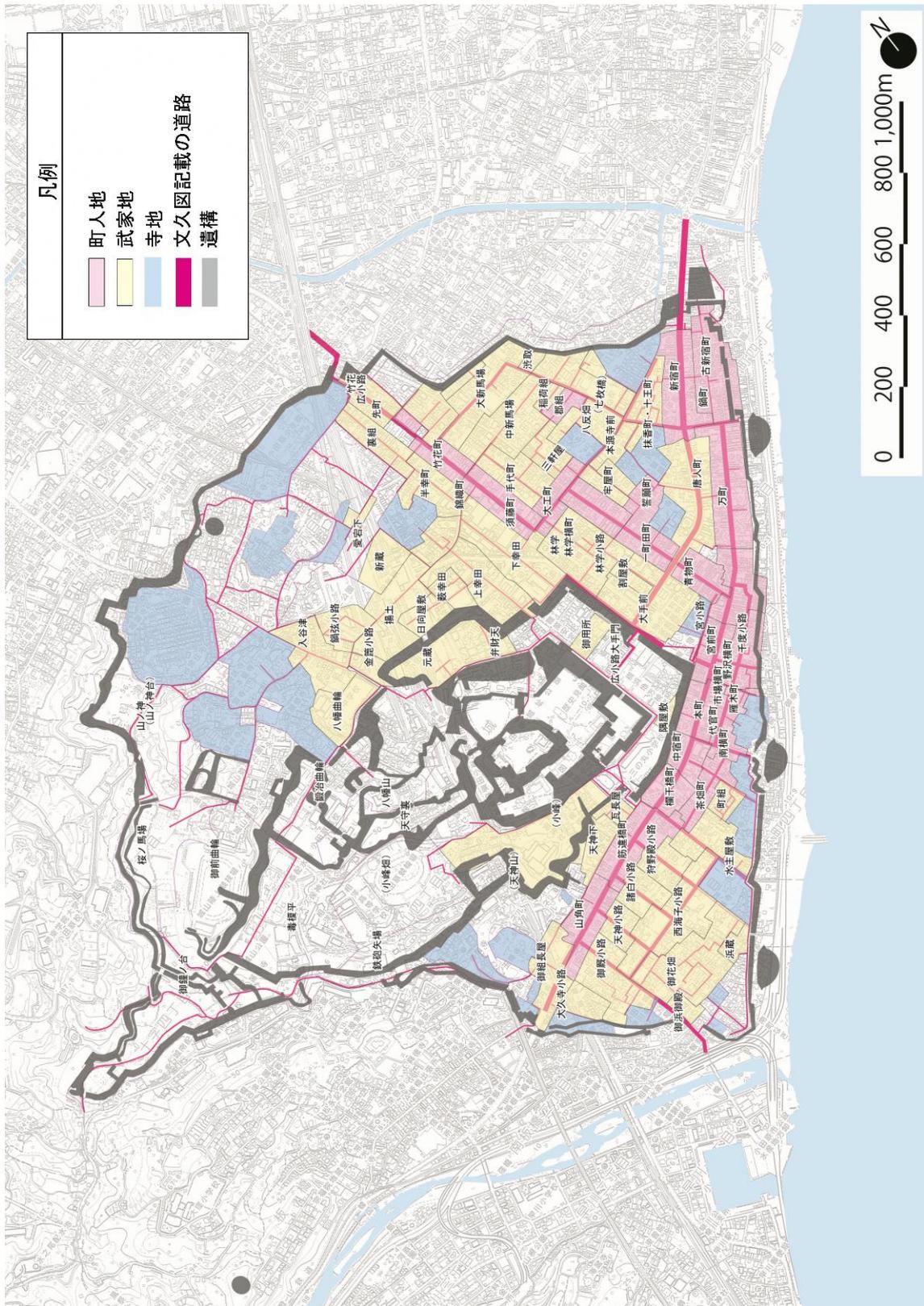
近世の城下町は、戦国時代以来のまち割りを継承しつつも、寛永10年(1633)の寛永小田原大地震を経て、稲葉氏時代に再編されて成立した。主な改修箇所は、東海道江戸口の付け替え、大手門の南側から東側への移設、御成道の整備、山角町と板橋村における寺町の形成などであり、これにより職能と身分による住み分けを前提とする近世城下町の基本的なまち割りが完成した。その町域やまち割りは、原則ほぼそのままの形で現代まで受け継がれており、現在の小田原の町の基礎はこの時に完成したと評価ができるだろう。

小田原宿の中心は、東海道沿いの通り町と呼ばれた9町(山角町・筋違橋町・欄干橋町・中宿町・本町・宮前町・高梨町・万町・新宿町)と、東海道南側の海岸沿いの4町(茶畑町・代官町・千度小路・古新宿町)、東海道を起点として北へ向かう甲州道沿いの6町(青物町・一丁田町・台宿町・大工町・須藤町・竹花町)からなる脇町10町の合計19町の町人地から形成されていた。

町人地の屋敷割は、有力町人の屋敷を除いて東海道と甲州道の両側に間口5間、奥行20間程度の短冊形の区画となっており、現在の土地利用もこの屋敷割が基本となっている。町家の屋根の多くは、板屋根を割竹でおさえる小田原葺と呼ばれる葺き方でつくられ、瓦葺は有力商人などの家に限られていた。



1-38 小田原城絵図「文久図」(1861-1864年頃)



1-39 江戸時代のまち割りと道路（小田原城絵図「文久図」より作成）

<宿場町の発展>

幕府による東海道の宿駅制度の整備に伴って、小田原は東海道の箱根越えを控えた関東の玄関口として発達し、参勤交代の大名や多くの旅行者によって繁栄した。東海道では4番目の規模を誇る宿場町であり、最盛期（天保年間（1830～44））には本陣4軒・脇本陣4軒・旅籠95軒を数えた。この頃、全国には266名の大名がおり、参勤交代に際してはそのうちの157の大名が東海道を用いたが、小田原に宿泊した大名は実に110家に及んでいる。

東海道沿いの宮前町から筋違橋町にかけての一带が宿場町の中心であり、有力町人が経営する本陣は、宮前町（清水家）、本町（久保田家と片岡家）、欄干橋町（清水家）に所在し、旅籠は、欄干橋町・中宿町・本町・宮前町・高梨町に集中していた。町人町には、土産屋や食事・雑貨・衣料・漁屋といった商家が建ち並び、天保13年（1842）の「竹の花坪帳」によるとその業種は16業種にもものぼる。また、大工をはじめ、塗師や建具師、木地師などの北条氏以来の職人も多く居住していた。

なお、小田原では宿場町や定住人口の増加に相まって、食料需要が拡大した。その結果、宿内において魚食が普及し、宿場町小田原の発展とともに漁業も発達していく。城下の形成過程において、東海道筋の裏通りの的な位置づけがなされていた千度小路周辺は、江戸時代に漁業や廻船業、魚商などが多く居住する場所となり、小田原の漁業の拠点的地域であった。

しかしその一方で、宿の財政は時代とともに悪化し、小田原宿では文化3年（1806）、旅人の飲食給仕に従事する飯盛女の設置許可について請願書を提出して、収入増を目論んだ。発掘調査でも、簪・笄・紅皿・油壺・鬢盥などの飯盛女たちが身を飾るために用いた道具が集中して出土するような調査地点もある。



1-40 小田原宿における本陣、脇本陣等の位置

⑤近代 ー近代都市の形成ー

<藩制から町村制への移行>

明治3年(1870)、小田原藩が明治政府に廃城願を提出した。その結果、天守・門・櫓^{やぐら}などは解体され、900両で払い下げられる。さらに、翌年の廃藩置県によって小田原は小田原県の県庁所在地となり、小田原藩政に終止符が打たれた。その後、同年のうちに、小田原県は伊豆国^{いずのくに}の韮山県と合併して足柄県に改組となり、明治9年(1876)には、市域を含む相模国^{さがみのくに}部分が分割され、神奈川県に編入された。これに伴い、小田原は県庁所在地から解かれている。そして、明治22年(1889)の市制町村制施行により、旧小田原府内のうち谷津村を除く部分が小田原町となった。

<近代交通の発展と別邸文化の開花>

明治20年(1887)、東海道鉄道が東京から神戸まで開通した。しかし、国府津^{こうづ}から御殿場^{ごてんば}を経由するルートであったことから、小田原はその恩恵を受けることができなかった。

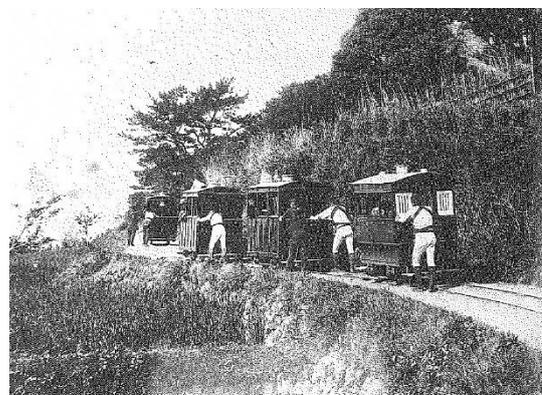
そのため、明治21年(1888)に東海道沿いに小田原馬車鉄道、明治29年(1896)には熱海道沿いに豆相人車鉄道^{ずそう}が敷設されるなど、周辺の主要交通路における交通手段の近代化が進められた。

その結果、小田原馬車鉄道が開通した明治21年(1888)、当時注目されていた海水浴や海岸リゾートのための旅館鷗盟館^{おうめいかん}が開業したのをはじめ、同様の旅館の開業が相次いだ。また、明治23年(1890)の伊藤博文^{いとうひろぶみ}による別邸滄浪閣^{そうろうかく}の建設などを皮切りに、大正期にかけて山縣有朋^{やまがたありとも}や益田孝^{ますだたかし}(鈍翁^{どんのう})など政財界の要人の別邸なども数多く建設された。その遺構の一部は現在も残されており、華やかな別邸文化の名残を今に伝えている。また、この間に北原白秋^{きたはらはくしゅう}ら文人の来往も増加している。

小田原町への玄関となっていた国府津^{こうづ}へも、大鳥圭介^{おおとりけいすけ}や大正天皇の侍従をつとめた加藤泰^{かとうやす}



1-41 豆相人車鉄道路線図(「豆相人車鉄道温泉夢物語パンフレット」を基に作成)



1-42 豆相人車鉄道の運行状況
(出典『一枚の古い写真』)

あき とくがわよしのが さいおん じきんもち おおくましげのぶ
秋、徳川慶喜や西園寺公望が来往しており、明治 41 年（1908）には大隈重信が別邸を構
えている。

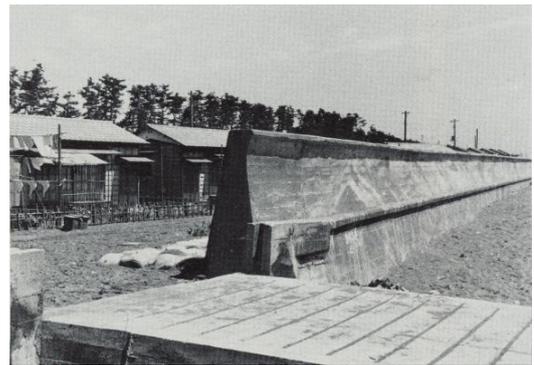
大正 9 年（1920）、熱海線の国府津—小田原
間が開通し、小田原は直通列車で東京方面と
結ばれることとなった。その後も熱海線の建
設は、大正 12 年（1923）の関東大震災による
甚大な被害を克服しながら進められ、昭和 9
年（1934）の丹那トンネル貫通により、小田
原—熱海—沼津間が全通した。これに伴い熱
海線は東海道本線に編入され、従来の国府津
から御殿場を経由する区間は御殿場線となった。こうして小田原は交通の要衝として再
び脚光を浴びるようになった。



1-43 昭和中期の小田原駅

<大規模な天災と復興>

小田原は、度重なる高波による被害を受けて
いる。中でも、明治 35 年（1902）の大海嘯（高
波）の発生は、沿岸部に大きな被害をもたらし
た。このような状況に対し、防波堤建設が必須
と考えられるようになり、県の支援や寄付金等
を得ながら、明治 38 年（1905）十字 4 丁目か
ら山王原に至る全長 2,370 メートルに及ぶ海
岸堤防が建設された。



1-44 西湘バイパス整備前の海岸堤防

今日この堤防は、その後沿岸に建設された西湘国道（現、西湘バイパス）の内陸側に
その名残を一部とどめている。

また、大正 12 年（1923）には、相模湾北西部を震源地とするマグニチュード 7.9 の関
東大地震が発生し、家屋の倒壊とその後の出火などによって甚大な被害をもたらした。

これらの自然災害により、関東大地震以前の建造物は、現在ほとんど目にすることが
できない。とはいえ、復興に際して建てられた建造物もすでに築後 100 年近くを経過し
ており、数少ない震災以前の建物とともに、本市の景観を形成する重要な要素となっ
ている。

⑥現代 ー積層する歴史、文化を活かしたまちへー

<小田原市の誕生>

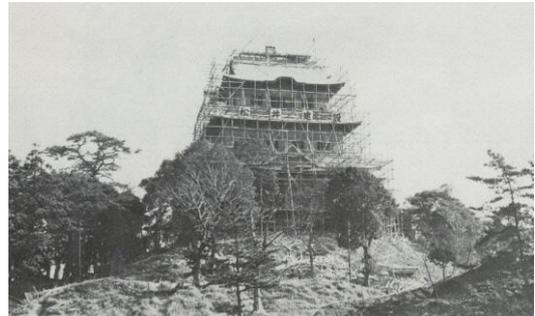
昭和 15 年 (1940)、^{おだわらまち}小田原町・^{あしがらまち}足柄町・^{おおくぼむら}大窪村・^{はやかわむら}早川村・^{さかわむら}酒匂村の一部が合併し、小田原市が誕生した。

その後、昭和 23 年 (1948) に^{しもふなかむら}下府中村、昭和 25 年 (1950) に^{さくらむら}桜井村、昭和 29 年 (1954) に^{とよかわむら}豊川村・^{こうづまち}国府津町・^{さかわまち}酒匂町・^{かみふなかむら}上府中村・^{しもそがむら}下曽我村・^{かたうらむら}片浦村、昭和 31 年 (1956) に^{そがむら}曽我村の一部と合併を重ね、昭和 46 年 (1971) の^{たちばなまち}橘町と合併により現在の市域が確定する。

<小田原城の復興>

^{おだわらじょうあと}小田原城跡は、明治維新後に天守等が解体され、残された石垣も大正 12 年 (1923) 9 月の関東大震災によりほぼ全壊し、江戸時代の姿は失われた。

しかし、史跡としての評価には高いものがあり、昭和 9 年 (1934) に^{すみやぐら}隅櫓が再建され、昭和 13 年 (1938) には史蹟名勝天然記念物保存法に基づく史蹟に指定される。



1-45 再建中の小田原城天守閣

その後、昭和 24 年 (1949) から始まった地元町内会の天守閣石一積運動が契機となって、天守閣復興の動きが活発になり、昭和 28 年 (1953) に天守台の石積工事が完成した。

次いで、市制施行 20 周年記念事業として天守閣の復興計画が練られ、現存する^{おだわらじょうてんしゅもけい}小田原城天守模型などを参考に、昭和 35 年 (1960) 5 月 25 日、廃城以来 90 年ぶりに天守閣が復興された。天守閣の復興に際しても瓦一枚寄付運動などによる市民の力があつた。

その後も^{おだわらじょうあと}小田原城跡では、国指定の史跡として復元整備が進められており、昭和 46 年 (1971) 3 月に^{ときわぎもん}常盤木門、平成 9 年 (1997) 10 月に^{あかがねもん}銅門、平成 21 年 (2009) 3 月には^{うまだしもん}馬出門が復興 (復元) され、往時の姿がよみがえりつつある。

<歴史都市、観光都市としてのまちへ>

昭和 39 年 (1964) に東海道新幹線が開通し、東京や横浜方面への所要時間が大幅に短縮され、観光とビジネスの両面で市域の経済発展などに大きく寄与することとなった。

東海道新幹線開通に際しては、市域中央部の^{かのみや}鴨宮に新幹線試運転のための基地が設けられ、昭和 37 年 (1962) から横浜～^{あたみ}熱海間で走行実験が何度も繰り返されている。既に整備されていた東海道本線・小田急小田原線・箱根登山鉄道・伊豆箱根鉄道^{だいゆうざん}大雄山線のほかに、東海道新幹線が開通し、鉄道 5 社が乗り入れることとなった小田原駅は、箱根や伊

豆方面への観光客の出入り口としても重要な役割を担っている。

一方、本市では、これまで文化財所管課を中心に小田原城跡^{おだわらじょうあと}などの文化財の保存活用に取り組んできたが、平成 23 年（2011）6 月に歴史まちづくり法に基づく『小田原市歴史的風致維持向上計画』が認定されたのを機に、文化財をはじめとする幅広い歴史文化遺産の有効活用を視野に入れたまちづくりを推進してきた。また、平成 30 年（2018）5 月 24 日に小田原市・箱根町・静岡県三島市・静岡県函南町に跨る、「箱根八里～旅人たちの足跡残る悠久の石畳道～」が日本遺産として認定されたことなどを踏まえ、周辺自治体との連携による広域的な観光資産の運用も図っている。

以上のように、本市には原始古代より連綿と続く歴史があり、市域では小田原城跡^{おだわらじょうあと}の周辺を中心に、中世小田原城の土塁の上に建つ近代別邸など新旧の遺跡等が同一空間に重層する歴史を垣間見ることができる。それは本市における都市景観上の特徴の 1 つでもあり、本市では『小田原市歴史的風致維持向上計画』により、これを活かしたまちづくりを目指していく。

(2) 関わりのある人物

伊勢宗瑞 (北条早雲) 【康正2年(1456)～永正16年(1519)】

戦国大名北条氏の祖。盛定の子。北条早雲は後世に呼び習わされた俗称で、正しくは伊勢新九郎盛時といい、出家後は早雲庵宗瑞と称した。室町幕府9代将軍足利義尚の申次等を務めたのち駿河の戦国大名今川氏親に仕え、その後伊豆韮山城を拠点に伊豆及び相模の2国を平定して関東戦国史の幕を開けた。この間明応年間(1492～1501)後半頃に小田原城を入手し、相模進出の前線基地としている。



1-46 伊勢宗瑞
(北条早雲) 肖像

北条氏綱 【長享元年(1487)～天文10年(1541)】

戦国大名北条氏2代。宗瑞の子。大永3年(1523)に伊勢から北条に改称した。宗瑞の生前から小田原城にあって拠点城郭としての整備を進め、永正15年(1518)の家督継承後は、本拠地を韮山から同地に移した。室町幕府12代将軍足利義晴や関白近衛尚通や内大臣三条西実隆をはじめ幕府や公家との交流が深く、その人脈を駆使して畿内方面の先進的な技術や文化の小田原への導入を図った。



1-47 北条氏綱肖像

豊臣秀吉 【天文6年(1537)～慶長3年(1598)】

豊臣氏初代。苗字は羽柴。弥右衛門の子とされる。関白、太政大臣を務める。織田信長に仕え、天正10年(1582)に信長が死去した後は、織田家宿老として柴田勝家及び丹羽長秀らとともに後継の信雄らを支えた。天正13年(1585)に関白に就任して以降は、公家とともに広範な武家を取込んだ政権を樹立し、同18年(1590)小田原城の北条氏を討って全国を統一した。その際、西方の石垣山に本営(石垣山城)を築いている。



1-48 豊臣秀吉肖像
(高台寺蔵)

いなば まさかつ
稲葉正勝【慶長2年(1597)～寛永11年(1634)】

小田原藩主^{いなば}稲葉氏初代。正成^{まさなり}の子。母は3代将軍徳川家光^{とくがわいえみつ}の信頼が厚^{かすがのつぼね}かった春日局^{ろうじゅう}。老中^{ろうじゅう}を務める。寛永9年(1632)に下野真岡藩^{しもつけもおか}(現、栃木県真岡市)から小田原藩^{てんぼう}に転封となり、翌年から小田原城の整備に着手した。直後の地震発生により整備事業は震災復興を兼ねるかたちで進められたが、その途上で死去した。



1-49 稲葉正勝肖像
(神奈川県立歴史博物館蔵)

いなば まさのり
稲葉正則【元和9年(1623)～元禄9年(1696)】

小田原藩主^{いなば}稲葉氏2代。正勝^{まさかつ}の子。老中^{ろうじゅう}を務める。寛永11年(1634)の藩主就任後、延宝3年(1675)まで、父正勝^{まさかつ}のあとを受けて断続的に小田原城と城下の整備を進め、現在まで残る城の縄張り^{しんしく}と城下のまち割り^{さかえちよう}等の原型を築いた。新宿^{しんじく}から栄町^{さかえちよう}の大手前^{おなりみち}に至る御成道^{おなりみち}(現、国道1号)等もこの時に整備されている。



1-50 稲葉正則肖像
(神奈川県立歴史博物館蔵)

おおく ほただきね
大久保忠真【安永7年(1778)カ～天保8年(1837)】

小田原藩主^{おおくほ}大久保氏(後期)7代。忠顕^{ただあき}の子。大坂城代・京都所司代・老中等^{ろうじゅう}を務める。家督継承は寛政8年(1796)。文武両道に通じて名君の誉れ高く、逼迫^{ひつぱく}した藩財政の再建等に努めるとともに、二宮尊徳^{にのみやそんとく}を登用して疲弊^{しもつけさくらまち}した下野桜町領^{しもつけさくらまち}(現、栃木県真岡市)、烏山領^{からすやま}(現、栃木県那須烏山市)など支藩等の復興等を進めた。



1-51 大久保忠真肖像

にのみやそんとく
二宮尊徳【天明7年(1787)～安政3年(1856)】

小田原栢山^{かやま}出身。農政家。報徳仕法^{ほうとくしほう}の創始者。百姓の出身ながら小田原藩士、次いで幕臣に登用され、小田原藩家老服部家の財政再建^{しもつけさくらまち}、下野桜町領^{しもつけさくらまち}(現、栃木県真岡市)・常陸谷田部領^{ひたちやたべ}(現、茨城県つくば市)・日光神領^{にっこうしんりょう}(現、栃木県日光市)の復興等を手掛けた。幼少期から青年期までを過ごした生誕地^かの栢山^{かやま}には、積小^{せきしょう}為大^{いだい}を着想したとされる捨苗栽培地跡^{すてなえさいばい}や油菜^{あぶらなさい}栽培



1-52 二宮尊徳肖像
(報徳博物館提供)

ばいちあと ほうとくしほう
培地跡など、のちの報徳仕法の形成につがる原体験の現場が今
も残されている。かやまむら
栢山村周辺の親族などの関係先等に残る遺品
等は、そんとくきねんかん
小田原市尊徳記念館で保管、展示、公開されている。

いとうひろぶみ 伊藤博文【天保12年(1841)～明治42年(1909)】

旧長州藩士。内閣総理大臣及び枢密院議長（いずれも初代）
等を務める。明治23年(1890) じゅうじ 十字634番地（現、みなみちょう
南町）に建築した別邸 せうろうかく のむらやすし おうむあん
滄浪閣は、野村靖の黄夢庵とともに本市にお
ける政治家の別邸建設としてはもっとも早い事例の1つとな
った。明治30年(1897)には せうろうかく おおいそ
滄浪閣を大磯に移すが、小田原
の建物はそのまま残され、大正12年(1923)の関東大震災で
倒壊するまでリゾート客向けの旅館 しょうじょうかん
養生館として用いられて
おり、一時 きたはらはくしゅう
北原白秋も療養のため滞在している。



1-53 伊藤博文肖像
(国立国会図書館デジタル
コレクションの転載)

やまがたありとも 山縣有朋【天保9年(1838)～大正11年(1922)】

旧長州藩士。内閣総理大臣・枢密院議長・陸軍参謀総長等を
務める。古稀を迎えた明治40年(1907)以降、いたばし
板橋に営んだ
別邸 こときあん
古稀庵で過ごしたが、なおも元老として首相指名に関わる
など中央政界に多大の影響を及ぼした。作庭に通じ、自ら差配
した こときあん
古稀庵の庭園は、ちんざんそう
椿山荘（東京）及び ぶりんあん
無鄰庵（京都）とと
もにその代表作とされる。また、こときあん
古稀庵に架蔵されていた旧蔵
図書の一部が山縣公御文庫として小田原市立中央図書館で保
存、公開されている。



1-54 山縣有朋肖像
(国立国会図書館デジタル
コレクションの転載)

ますだたかし 益田孝【嘉永元年(1848)～昭和13年(1938)】

旧佐渡国 の出身。実業家及び茶人。号は鈍翁。三井物産の設
立等に尽力し初代総轄等を務める。まつながやすざ えもん じあん
松永安左エ門（耳庵）及び
はらとみ たらう さんけい
原富太郎（三溪）とともに近代三茶人とも称され、大正3年
(1914)には、三井物産を退いて いたばし
板橋に建築した別邸 せううんたい
掃雲台に移
り、本市における近代茶道の流行、定着の契機をつくった。せう
掃雲台は滅失したが、九重層塔、下り竜等の石造物の一部は松永
記念館に移設されており、収集した茶器類のうち ますきの
牧野家に伝来
した一部が、さいかち
西海子（現、みなみちょう
南町）の どんのう さいかち
鈍翁in西海子に保管・展

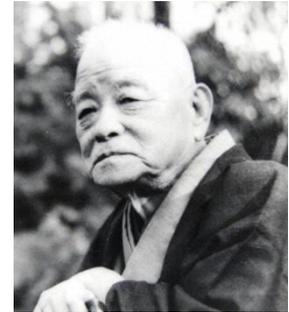


1-55 益田孝肖像

示されている。

野崎廣太【安政6年(1859)～昭和16年(1941)】

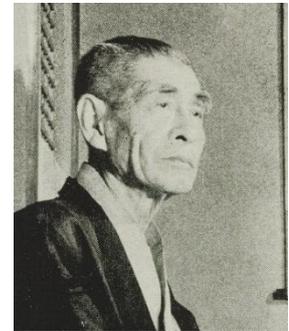
旧備中国の出身。実業家及び茶人。号は幻庵。中外物価新報（現、日本経済新聞）及び三越呉服店（現、三越）の社長等を務める。晩年の大正13年（1924）頃、諸白小路に別邸自怡荘を営み茶道にいそしむ。益田孝や松永安左エ門らのほか陶器商の岩田忠八（南町 旧江嶋屋陶器店）ら市井の人々とも茶道を通じ交流を有した。自怡荘内にあった茶室である葉雨庵は、松永記念館敷地内に移築・公開されている。



1-56 野崎廣太肖像

松永安左エ門【明治8年(1875)～昭和46年(1971)】

旧壱岐国の出身。政治家・実業家・茶人。号は耳庵。衆議員議員・電気事業再編成審議会会長等を務める。昭和21年（1946）板橋に別邸老樗荘を構えて終の棲家とし、以後茶道を介して政財界人、小田原市民らと交流した。また昭和34年（1959）には収集した国宝である釈迦金棺出現図等の美術品類を一般に展覧するため松永記念館を設立している。松永の没後、同館及び老樗荘は相次いで本市に譲渡され、松永の事績顕彰等のための施設として整備、公開されており、庭園内には松永が収集した奈良長岳寺五重層塔などの石造物が残されている。



1-57 松永安左エ門肖像
(国立国会図書館デジタル
コレクションの転載)

大倉喜八郎【天保8年(1837)～昭和3年(1928)】

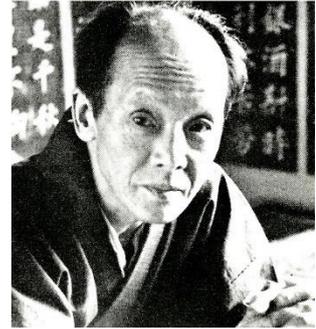
旧越後国の出身。実業家。大倉財閥の創設者。大正9年（1920）に、板橋の古稀庵西隣に別邸である共寿亭を建築した。敷地は幅広い情報収集によって山縣に重用された政治家松本剛吉から購入したとみられ、別邸建築をめぐる政財界人相互の交流が知られる点も重要といえる。



1-58 大倉喜八郎肖像
(国立国会図書館デジタル
コレクションの転載)

^{おぎかず お}
尾崎一雄【明治 32 年(1899)～昭和 58 年 (1983)】

三重県出身。のち小田原^{しもそが}下曾我の父の実家に移る。小説家。
昭和 12 年(1937)に第 5 回芥川賞を受賞、昭和 53 年 (1978) に
は文化勲章を受章した。随筆を中心に幼少期から^{しもそが}過ごした下曾
^が我を舞台とした作品が多く、梅の里として知られる同地の往時
の景観等を知るうえで貴重な資料となっている。^{しもそが}下曾我の旧宅
の一部は、小田原文学館敷地内に移築、公開されている。



1-59 尾崎一雄肖像

^{かわさきちょう たらう}
川崎長太郎【明治 34 年(1901)～昭和 60 年(1985)】

小田原出身。小説家。^{まんねんちょう}万年町の居住地周辺を舞台として路地
裏に生きる人々に取材した「^{まっこうちょう}抹香町もの」と呼ばれる作品群で
知られる。随所で活写される^{さかえちょう}栄町及び^{みなみちょう}南町から^{はやかわ}早川にかけ
ての散策路沿いの風景や人々との交流の様子等は、かつての市
街地の歴史的風致の有様をうかがわせる貴重な資料ともなっ
ている。



1-60 川崎長太郎肖像

4 文化財等の分布状況

本市には、令和7年（2025）11月現在、国指定8件、県指定25件、市指定119件、合わせて152件の指定文化財がある。また29件の建造物が国の登録有形文化財として登録されている。

1-61 文化財の種類と小田原市内の指定数と登録数（件）（令和7年（2025）11月現在）

種別		国指定	県指定	市指定	国登録	合計
有形文化財	絵画	1	2	11	—	14
	彫刻	2	7	4	—	13
	工芸品	—	1	7	—	8
	古文書	—	—	25	—	25
	考古資料	—	2	4	—	6
	歴史資料	—	1	17	—	18
	建造物	—	5	11	29	45
民俗文化財	有形の民俗文化財	—	—	4	—	4
	無形の民俗文化財	1	2	4	—	7
記念物	遺跡	3	1	11	—	15
	動物、植物、地質鉱物	1	4	21	—	26
合計		8	25	119	29	181
		152				

（1）国指定の文化財

相模人形芝居（下中座）【重要無形民俗文化財】

相模人形芝居は、文楽と同様の三人遣いという様式で、義太夫節にあわせて1体の人形を3人の遣い手が操作する人形浄瑠璃である。相模人形芝居の特徴は、カシラ（人形の頭部）の大きさが文楽よりやや小さいことや、鉄砲ざしと呼ばれる操法が残っていることなどである。鉄砲ざしとは、芝居の見せ場でポーズをとる時、観客に向かって人形を前に傾ける構えをいうが、その主遣い（人形のカシラと右手を操る人）の腕の構えが、鉄砲を構えた形に似ていることから名づけられた。



1-62 下中座の公演

昭和26年（1951）から昭和28（1953）年にかけての県文化財保護専門委員会の調査当

時、活動を続けていた下中座（小田原市）、長谷座（厚木市）、林座（厚木市）の三座が、相模人形芝居の名称のもとに、昭和 28 年（1953）県の無形文化財に指定された。昭和 51 年（1976）神奈川県文化財保護条例改正に伴い、県の無形民俗文化財に再指定され、昭和 55 年（1980）、国の重要無形民俗文化財に指定された。現在は、この三座に前鳥座（平塚市）、足柄座（南足柄市）を加えた五座で、相模人形芝居連合会として年に 1 度の五座大会を開くなど研鑽するとともに普及、啓発にも努めている。

このうち、下中座は、江戸期中頃から、小竹の人形として知られてきたが、伝承では、上方の人形遣いの一行が江戸への旅興行の途中に小竹村に立ち寄り、村人に技術を伝えたことが始まりとされている。

小田原城跡【史跡】

小田原城の築城については、15 世紀中頃の康正年間（1455～1457）と伝える史料があるが、その確実な年代については明らかではない（「鎌倉大草紙」）。当初は大森氏が領する城であったが、明応年間（1492～1501）後半頃に伊勢宗瑞（北条早雲）の手に帰し、宗瑞の跡を継いだ 2 代氏綱からは北条氏の本城として位置づけられた。



1-63 小田原城跡

その後、永禄年間（1558～1570）、上杉謙信と武田信玄が相次いで来攻するが、3 代氏康及び 4 代氏政は籠城してこれを退けている。この間、小田原城では、たびたび改修工事が行われ、天正 18 年（1590）の小田原合戦を迎える頃には、周囲 9 km に及ぶ総構の構築により戦国期最大級の城郭へと発展した。

総構は、堀と土塁で形成されており、海岸線及び低地部から丘陵部に至るまで、自然地形を巧みに利用して構築された。丘陵部の稲荷森や城下張出などや低地部の蓮上院土塁や早川口遺構など、良好に保全されたその遺構の一部は国指定の史跡に指定されている。

江戸時代になると、江戸の西を守る要の城として位置づけられ、譜代大名が歴代城主を務めた。寛永 10 年（1633）、小田原城は寛永小田原大地震により甚大な被害を受け、戦国時代以来の城郭遺構の多くを失ったが、稲葉正勝により進められた改修によって、石垣、白亜の天守が聳える近世城郭へと生まれ変わった。

明治維新を迎えると、小田原藩知事大久保忠良はいわゆる廃城令（明治 6 年（1873））を待たずに明治 3 年（1870）に廃城願いを提出し、隅櫓を除くすべての建築物が解体された。その後、小田原城は宮家の御用邸としても用いられたが、大正 12 年（1923）の大

正関東大地震により、唯一残っていた隅^{すみやぐら}櫓や江戸時代以来の石垣の多くも崩れ去った。これを機に、二の丸堀を埋め立てる計画なども浮上するが、地元有志の保存運動などによって中止となり、その後石垣も復元されて城跡としての価値を維持することができた。

国の史跡への指定は昭和 13 年（1938）が最初であり、江戸時代の二の丸の区画および三の丸土塁、戦国期の遺構が残る丘陵部の一部などが指定された。以後、令和 2 年（2020）までに 12 次に至る追加指定が行われている。そして、昭和 35 年（1960）に天守閣^{てんしゅかく}が復興、昭和 45 年（1970）に常盤木門^{ときわぎもん}が復興、平成 9 年（1997）に銅門^{あかがねもん}が復元、平成 21 年（2009）に馬出門^{うまだしもん}が復元的整備され、江戸時代の小田原城の姿が甦りつつある。

いしがきやま 石垣山【史跡】

石垣山^{いしがきやま}は、天下統一を目指す豊臣秀吉^{とよとみひでよし}が小田原城を攻略するため、天正 18 年（1590）に築いた城郭である。穴太衆^{あのをしゅう}による野面積みの石垣^{のづら}が構築された東日本唯一の城郭で、豊臣秀吉自身によるとその普請は「聚楽又ハ大坂の普請を数年させられ候ニ不相劣様ニ（聚楽第（京都市）や大坂城（大阪市）で数年行った普請に匹敵するような）」規模で行われたという（「浅野家文書」）。



1-64 石垣山

この城郭の正式な名称は不明であるが、松平家忠^{まつだいらいえただ}がその日記に「石かけの御城」と記していることなどから、石垣山城^{いしがきやまじょう}との呼称が用いられている（「家忠日記」）。また、一夜城^{いちやじょう}とも呼ばれており、これについては伊達政宗^{だてまさむね}が登城した際に、前日にはなかった白壁^{はくへき}ができあがっていたとの記録などに由来する可能性がある。「北条記^{ほうじょうき}」や「関八州古戦録^{かんはっしゅうこせんろく}」などには豊臣秀吉^{とよとみひでよし}が一夜のうちに周囲の樹木を伐採させ、一夜にして城郭が出現したように見せかけて北条側^{ほうじょう}を驚かせたとの記述もある。

石垣山城^{いしがきやまじょう}は、実際には 82 日をかけて築城されているが、石垣山^{いしがきやま}からは「天正十九年」「辛卯（1591 年）八月日」との刻書のある瓦が出土していることから、小田原合戦翌年の天正 19 年（1591）にも普請及び作事が行われていた可能性があり、同年の奥州仕置に際しても豊臣秀吉^{とよとみひでよし}が石垣山^{いしがきやま}に在陣したことをうかがえる。

現在も石垣山^{いしがきやま}には多数の石垣が残存しているが、崩壊している個所も目立つ。これは、大正 12 年（1923）の関東大地震により崩れたものとされてきたが、石垣の崩壊箇所が虎口^こや隅部に集中している様子から、近年では破城（城割）の痕跡とする見方もある。

石垣山^{いしがきやま}は、豊臣秀吉^{とよとみひでよし}が天下統一を決定的とするという日本史の一頁を飾る城郭として重要な資産であり、昭和 34 年（1959）に国の史跡に指定されている。

江戸城石垣石丁場跡（早川石丁場群関白沢支群）【史跡】

江戸城石垣石丁場跡は、神奈川県から静岡県にかけての伊豆半島とその周辺に分布しており、慶長8年（1603）から寛永13年（1636）にかけて行われた江戸城の築城及び修築に伴う公儀御普請で用いる石垣の石材を切り出した石丁場の跡である。

江戸城用の石丁場の多くは、海岸近くか河川沿いなど水上運送の便の良い山中に立地しており、採石

と加工を行う山中の作業場、搬出前の石材をとどめ置く仮置き場、石材の搬出路である石曳道、船積を行う港などからなる。山中の作業場にはいずれの場所でも碎石のために矢穴が打たれた石材が点在している。



1-65 江戸城石垣石丁場跡

早川のピランジュ【天然記念物】

本樹木は、石垣山北側凹地の約50mのがけの急斜面に自生する巨木である。根元の南側（高地面）が土に覆われており、北面（低地面）より1mほど高くなっている。南側の土ぎわを基準に測定した株元周囲は、およそ6mである。

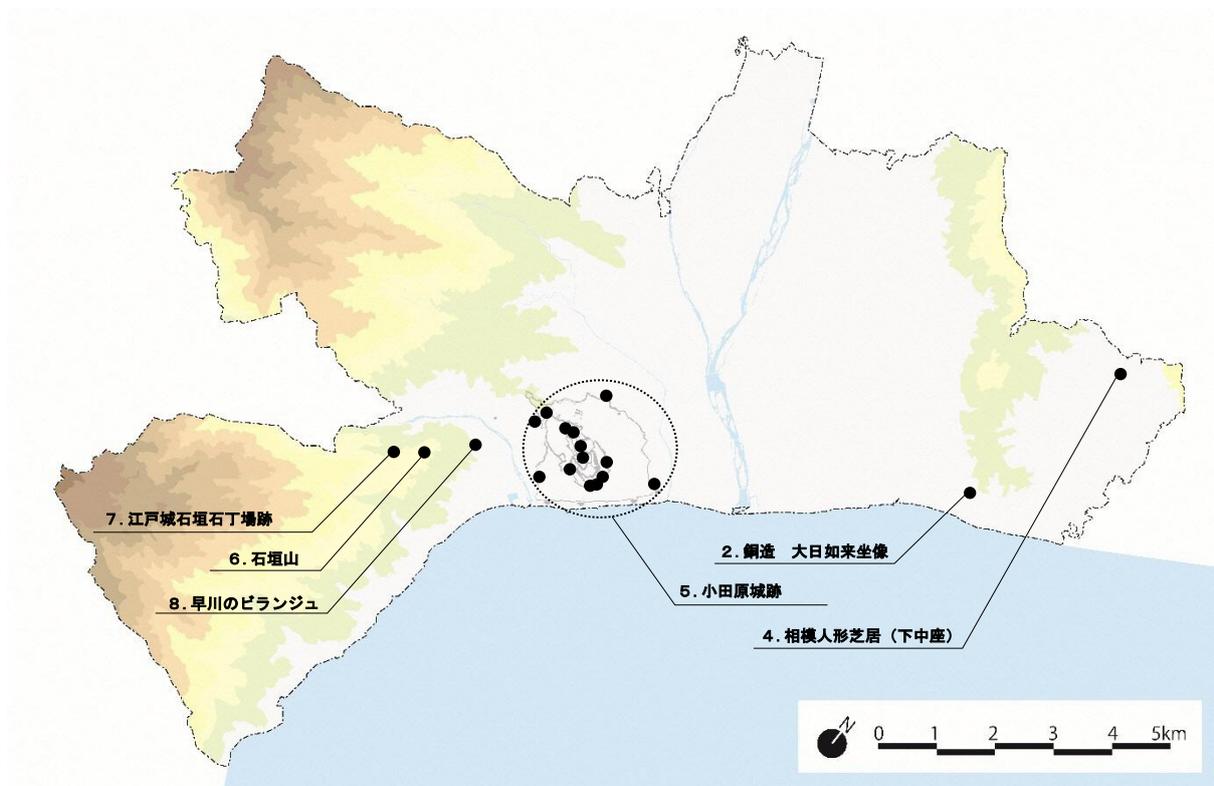
ピランジュの樹皮は、灰褐色で、成長とともにうろこ状となって自然にはがれ、そのあとの幹の肌が紅黄色の独特な色彩になる。標準和名はバクチノキであり、これは樹皮のはがれる様子が、博打に負けて衣を剥がれることにたとえられたことに由来する。



1-66 早川のピランジュ

1-63 国指定の文化財の一覧 (令和4年(2022)11月現在)

No	種別		名称	所在地
1	有形 文化財	絵画	絹本 著色 阿彌陀如来像 <small>けんぼんちやくしよく あみだにょらいぞう</small>	東京国立博物館
2		彫刻	銅造 大日如来坐像 <small>どうぞう たいにちによらいざぞう</small>	国府津2038 寶金剛寺
3			木造 真教坐像 <small>もくぞう しんきょうざぞう</small>	神奈川県立歴史博物館
4	重要無形民俗文化財		相模人形芝居 (下中座) <small>さがみにんぎょうしばい しもなかざ</small>	小竹
5	史跡	小田原城跡 <small>おだわらじょうあと</small>		浜町・栄町・城内・城山・緑・十字・ 本町・谷津・南町・荻窪・板橋
6		石垣山 <small>いしがきやま</small>		早川字梅ヶ窪
7		江戸城石垣石丁場跡 <small>えどじょういしがきいしちようばあと</small> (早川石丁場群関白沢支群) <small>はやかわいしちようばぐんかんぱくざわしぐん</small>		早川字梅ヶ窪・箕ヶ窪・姫ノ水
8	天然記念物		早川のピランジュ <small>はやかわ</small>	早川字飛乱地



1-68 国指定の文化財の位置

(2) 県指定の文化財

勝福寺本堂【有形文化財（建造物）】

勝福寺は、真言宗東寺派の名刹であり、十一面観音を本尊とする。通称、飯泉観音とよばれており、坂東三十三観音の第五番札所として有名である。寺伝によれば、弓削道鏡が北千代台に創建した千葉山弓削寺の東院堂がその前身であるといい、現所在地の飯泉に移された後、小田原城の鬼門古鎮守の道場としてあがめられた。



1-69 勝福寺本堂

現在の本堂は、「棟札」により、宝永3年（1706）に小田原藩主大久保忠増により再建されたものであることがわかる。この本堂も老朽化のため昭和41年（1966）から43年（1968）にかけて半解体修理を行い、その際に屋根も茅葺から銅板葺に変えられた。

勝福寺では、関東地方の中でも1年で一番早い時期である12月17日、18日にだるま市が開かれており、境内には数多くのだるまを売る店の軒が並び、商売繁盛や家内安全を願う家族連れなどで賑わっている。

小田原市羽根尾貝塚の縄文時代前期出土品【有形文化財（考古資料）】

小田原市羽根尾貝塚は、今から5,800年前の縄文前期、縄文海進期と呼ばれる比較的温暖な気候の時代に形成されたと考えられている。大磯丘陵から派生する丘陵最先端に位置し、貝塚と低湿地とからなる遺跡である。



1-70 羽根尾貝塚出土関山I式土器

出土した遺物には、縄文前期の関山式及び黒浜式土器のほか、漆塗りの木製容器、丸木舟を漕ぐための櫂、骨や角で作った髪飾りや釣針などの生活の道具がある。また、カツオ、イシナギなどの魚類、イノシシ、シカ、イルカなどの哺乳類の骨や歯、クルミなどの木の実といった縄文人たちの食べかすなども含まれている。

お だ わ ら し な か ざ と い せ き や よ い し だ い ち ゅ う き し ゅ つ ど ひ ん
小田原市中里遺跡の弥生時代中期出土品【有形文化財（考古資料）】

お だ わ ら し な か ざ と い せ き あ し が ら へ い や さ か わ が わ
小田原市中里遺跡は、足柄平野南東部の酒匂川左岸に位置し、弥生中期中葉における東日本最大級の規模を誇る集落である。



1-71 中里遺跡の出土品

出土品には地元で作られた土器のほか、近畿地方、東海地方、中部高地、北陸地方、関東地方北部、東北地方南部といった各方面の遠隔地の土器が認められたことが大きな特徴である。

石器は、^{たいりくけい ま せい せき ふ}大陸系磨製石斧と呼ばれる弥生時代に特徴的な伐採用及び加工用の斧類のほか、製作途中の石斧や石斧を作るための道具（^{たたきいし}敲石・^{だいいし}台石・^{といし}砥石）も出土しており、農耕具などの木製品や石斧を製作していたことがわかる。また、^{くわ}鋤や^{はたおりぐ}機織具などの木製品は、弥生時代の関東では最古級の資料である。

本資料からは、関東地方における本格的な稲作文化の受容が弥生中期中葉であったこと、近畿地方や東海地方からの影響を大きく受けていたことなどが明らかになった。このため、本県をはじめ南関東地方における稲作農耕社会への転換期の様相を解き明かす上で、欠くことのできない重要な資料と評価されている。

て ら や ま じ ん じ ゃ か し ま お ど り ね ぶ か わ か し ま お ど り ほ ぞ ん かい
寺山神社の鹿島踊（根府川鹿島踊保存会）【無形民俗文化財】

ね ぶ か わ て ら や ま じ ん じ ゃ か し ま お ど り
根府川にある寺山神社の鹿島踊は、同社の祭礼の日にあたる7月の第3日曜日とその前日の宵宮で奉納される。航海の安全と豊漁、さらには悪疫退散の祈願を主体とした神事舞踊の性格が濃い鹿島踊は、^{か し ま お ど り}鹿島神宮（茨城県）を本祭地とする^{か し ま}鹿島信仰が伝わったものと考えられている。本市周辺では、^{いし ば し}石橋を北端とし海岸線に沿った南方の静岡県東伊豆町北川まで25箇所が存在が確認され、この一帯が江戸時代には漁業や石材の採取・運搬業を営む地域であったことに関連すると指摘されている。



1-72 鹿島踊

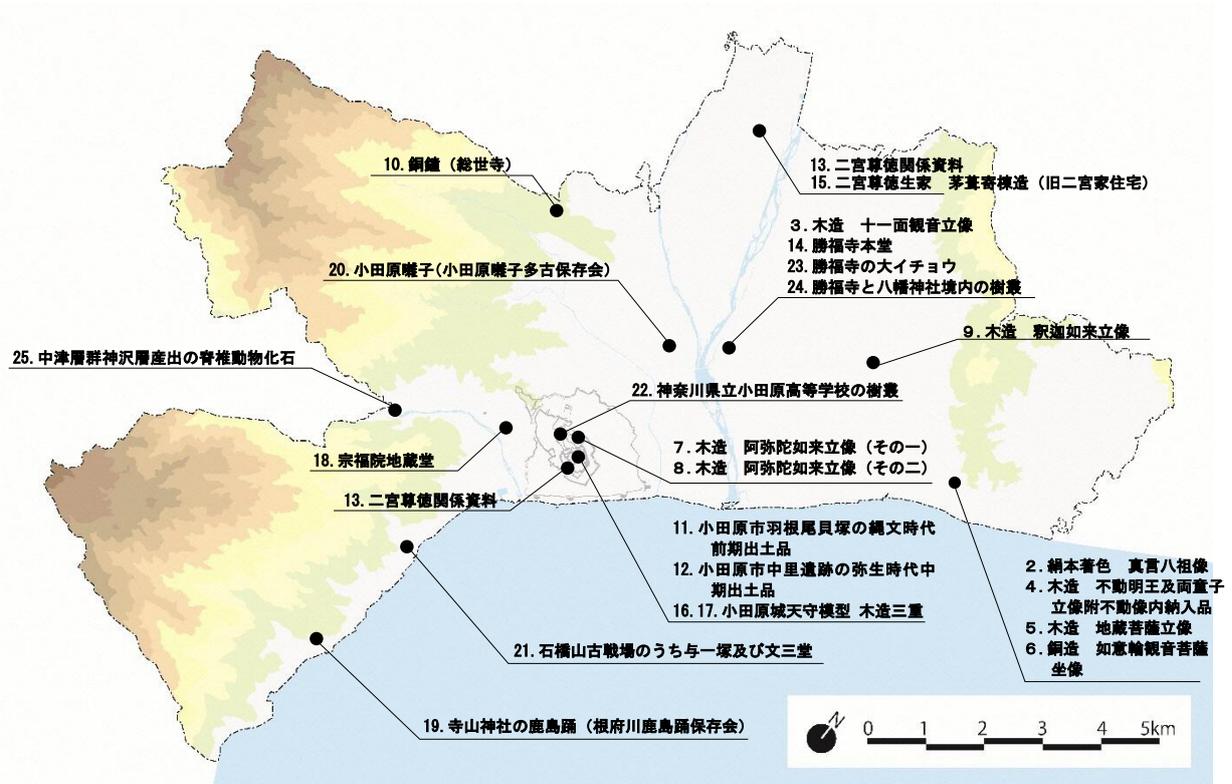
おだわらばやし おだわらはやし たこほぞんかい
小田原囃子（小田原囃子多古保存会）【無形の民俗文化財】

小田原囃子は、祭囃子の一種で、江戸葛西囃子から発生した関東祭囃子の系統に属する。江戸中期以降、市内各地に広がって、神社の祭礼はもとより道祖神のお祭りでも行われるようになった。小田原にあった桐座という芝居小屋の囃子方が祭好きの近隣の若者に伝えたことが始まりともいわれている。

その音曲は、笛、大太鼓、小太鼓、摺鉦を使用した変化に富んだもので独特の風格を持っており、地域や保存会などによりその技術の保存と継承が図られている。



1-73 小田原囃子
 (小田原囃子多古保存会)



1-74 県指定の文化財の位置

1-75 県指定の文化財の一覧 (令和7年(2025)11月現在)

No	種別	名称	所在地
1	絵画	けんほんちやくしよく にちれんしやうにんざう 絹本 著色 日蓮上人像	鎌倉国宝館
2		けんほんちやくしよく しんごんはつ そぞう 絹本 著色 真言八祖像	国府津2038 寶金剛寺
3	彫刻	もくぞう じゅういちめんくわんおんりゅうざう 木造 十一面観音立像	飯泉1161 勝福寺
4		もくぞう ふ どうみまうおつおまひりやうどう しりゅう 木造 不動明王及両童子立 ざうつけたり ふ どうぞうないのうにゆうひん 像 附 不動像内納入品	国府津2038 寶金剛寺
5		もくぞう じぞう ほ さつりゅうざう 木造 地藏菩薩立像	国府津2038 寶金剛寺
6		どうざう にょいりんかんのん ほ さつ さぞう 銅造 如意輪観音菩薩坐像	国府津2038 寶金剛寺
7		もくぞう あ み たにょちりゅうざう 木造 阿弥陀如来立像(その一)	城山2-1-24 本誓寺
8		もくぞう あ み たにょちりゅうざう 木造 阿弥陀如来立像(その二)	城山2-1-24 本誓寺
9		もくぞう しゃか にょちりゅうざう 木造 釈迦如来立像	別堀74 東学寺
10		工芸	どうしやう そうせいし 銅鐘 (総世寺)
11	考古資料	おだわらしほね おかいつか じやうもんじだい 小田原市羽根尾貝塚の縄文時代 ぜんきしゆつどひん 前期出土品	小田原市郷土文化館 ほか
12		おだわらしなかさといせき やよいしだいちゆう 小田原市中里遺跡の弥生時代中 きしゆつどひん 期出土品	小田原市郷土文化館 ほか
13	歴史資料	にのみやぞんとくかんけいしりやう 二宮尊徳関係資料	報徳博物館、尊徳記念館 ほか
14	建造物	しょうふくじ ほんどう 勝福寺本堂	飯泉1161
15		にのみやぞんとくせい か かやぶきよせむねづくり きゆう 二宮尊徳生家 茅葺寄棟造(旧 にのみやけ じゅうたく 二宮家住宅)	栢山2064
16		おだわらしやうてんしゆもけい もくぞうさんじゆう 小田原城天守模型 木造三重	小田原城天守閣
17		おだわらしやうてんしゆもけい もくぞうさんじゆう 小田原城天守模型 木造三重	小田原城天守閣
18		ぞうふくいん じぞうどう 宗福院地藏堂	板橋566 宗福院
19	無形民俗文化財	てらやましんじや かしまおどり ねぶかわてらやま 寺山神社の鹿島踊(根府川寺山 じんじや かしまおどり ほぞんかい 神社鹿島踊保存会)	根府川92
20		おだわらばやし おだわらばやしだこほぞん 小田原囃子(小田原囃子多古保存 かい)	扇町5-7-29
21	史跡	いしはしやま こせんじやう よいちづか 石橋山古戦場のうち与一塚及び ぶんぞうどう 文三堂	石橋470 与一塚、 米神136 文三堂
22	天然記念物	か な がわげんりつ おだわらこうとうがっこう じゆ 神奈川県立小田原高等学校の樹 そう 叢	城山3-26-1 県立小田原高等学校
23		しょうふくじ 勝福寺の大イチョウ	飯泉1161 勝福寺
24		しょうふくじ はちまんじんじやけいだい じゆそう 勝福寺と八幡神社境内の樹叢	飯泉1161 勝福寺、 飯泉1162 八幡神社
25		なかつ ぞうぐんかんざわぞうさんしゆつ せきついでうぶつ 中津層群神沢層産出の脊椎動物 かせき 化石	入生田499 県立生命の星・地球博物館

(3) 市指定の文化財

さんのうばらたいりょう き やりうた
山王原大漁木遣唄【無形の民俗文化財】

たいりょう き やりうた さがみわん せいしやう
大漁木遣唄は、相模湾一帯の漁民、特に西湘地区
で古くから歌われている。小田原のたいりょう き やりうた
大漁木遣唄は、
漁業に従事する際の仕事唄と婚礼や神社祭礼時の儀
式唄を兼ねていて、全国的にも珍しいものである。



1-76 大漁木遣唄

ことぶきし しまい
寿獅子舞【無形の民俗文化財】

獅子舞は大別すると、一人立ち獅子舞と二人立ち
獅子舞に分かれるが、そがの獅子舞は一人立ちの方
で、関東や東北にこの形が多く伝承されている。この
獅子舞は江戸時代から伝わっているはやし獅子舞の
系統で、現在の横浜地方で盛んに行われたものだが、
せいしやう そがべつしよ
西湘地方では曾我別所だけに伝わる貴重な芸能で
ある。



1-77 寿獅子舞

氏子の無病息災と悪魔を払い豊年を祈願する舞として、そがじんじゃ
宗我神社に奉納され、代々村
の長によって伝承されてきたが、昭和に入ってから衰退した。しかし、昭和 22 年 (1947)
に二人立ちから一人立ちに変えるなど内容を大きく変更して復活した。

ことぶきし しまい そがべつしよことぶきし しまい そがじんじゃ
寿獅子舞は、曾我別所 寿獅子舞保存会によって宗我神社祭礼 (9 月) 時に奉納され
るとともに、そがの梅まつり時でも演じられ、多くの観光客を楽しませている。

稲葉一族の墓所と鉄牛和尚の寿塔【史跡】

稲葉氏は、寛永9年（1632）から貞享2年（1685）まで、3代約50年間、小田原藩主を務めた。2代正則は、寛永12年（1635）に父母の追福のため、城下の山角町に菩提寺（長興山紹太寺）を建立し、寛文9年（1669）にこれを入生田に移した。

黄檗宗の巨刹であったこの寺は、幕末の火災で堂塔が焼失し荒廃したが、稲葉一族の墓と鉄牛和尚の寿塔は当時の姿そのままに残されており、かつての紹太寺の隆盛をしのばせる貴重な遺跡となっている。



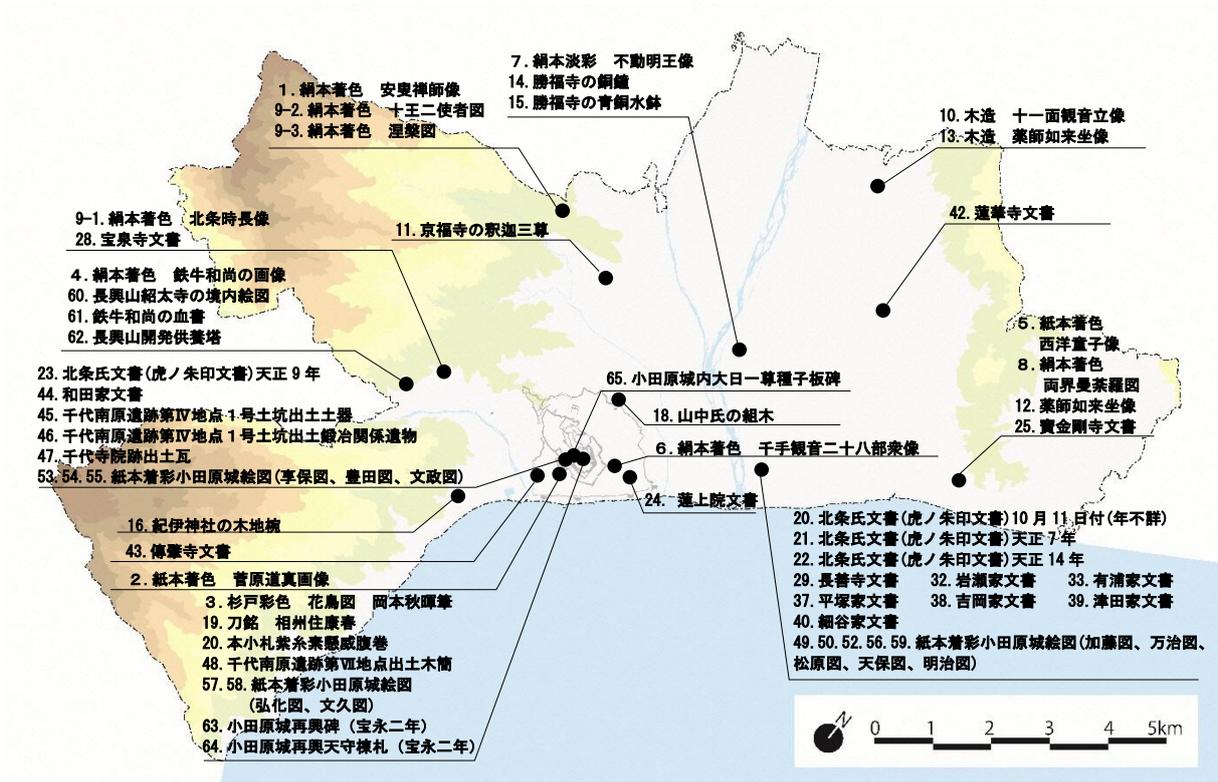
1-78 稲葉一族の墓所

長興山の枝垂桜【天然記念物】

本桜は、稲葉氏が紹太寺を建立した頃、その境内に植えられたもので、樹齢350年以上と推定されている。枝を八方へ平均に広げ、枝垂桜の基本的な形を整えている。3月下旬から4月上旬にかけて、ソメイヨシノより一足早く濃い緑の樹叢を背景に開花する。近年は、樹勢の衰えが見られるため、樹勢回復の治療を継続して行っている。



1-79 長興山の枝垂桜



1-80 市指定の文化財の位置（建造物を除く有形文化財）

1-81 市指定の文化財の一覧（建造物を除く有形文化財）（令和7年（2025）11月現在）

No	種別	名称	所在地	
1	有形文化財	絹本著色 安叟禅師像	久野3670 総世寺	
2		紙本著色 菅原道真画像	南町1-5-37 天神社	
3		杉戸彩色 花鳥図 岡本秋暉筆	小田原城天守閣	
4		絹本著色 鉄牛和尚の画像	入生田303 紹太寺	
5		紙本著色 西洋童子像	国府津2038 寶金剛寺	
6		絹本著色 千手観音二十八部衆像	栄町4-3-3 本源寺	
7		絹本淡彩 不動明王像	飯泉1161 勝福寺	
8		絹本著色 両界曼荼羅図	国府津2038 寶金剛寺	
9-1		絹本著色 北条時長像	風祭918 宝泉寺	
9-2		絹本著色 十王二使者図	久野3670 総世寺	
9-3		絹本著色 涅槃図	久野3670 総世寺	
10		彫刻	木造 十一面観音立像	下大井268 泉蔵院
11			京福寺の釈迦三尊	久野885 京福寺
12			薬師如来坐像	国府津2038 寶金剛寺
13		工芸品	木造 薬師如来坐像	下大井268 泉蔵院
14			勝福寺の銅鐘	飯泉1161 勝福寺
15			勝福寺の青銅水鉢	飯泉1161 勝福寺
16			紀伊神社の本地椀	早川9 紀伊神社
17	油田治雄(木泉)作 木象嵌吉祥天像額		栢山 個人宅	
18	山中氏の組木		荻窪384 山中組木工房	

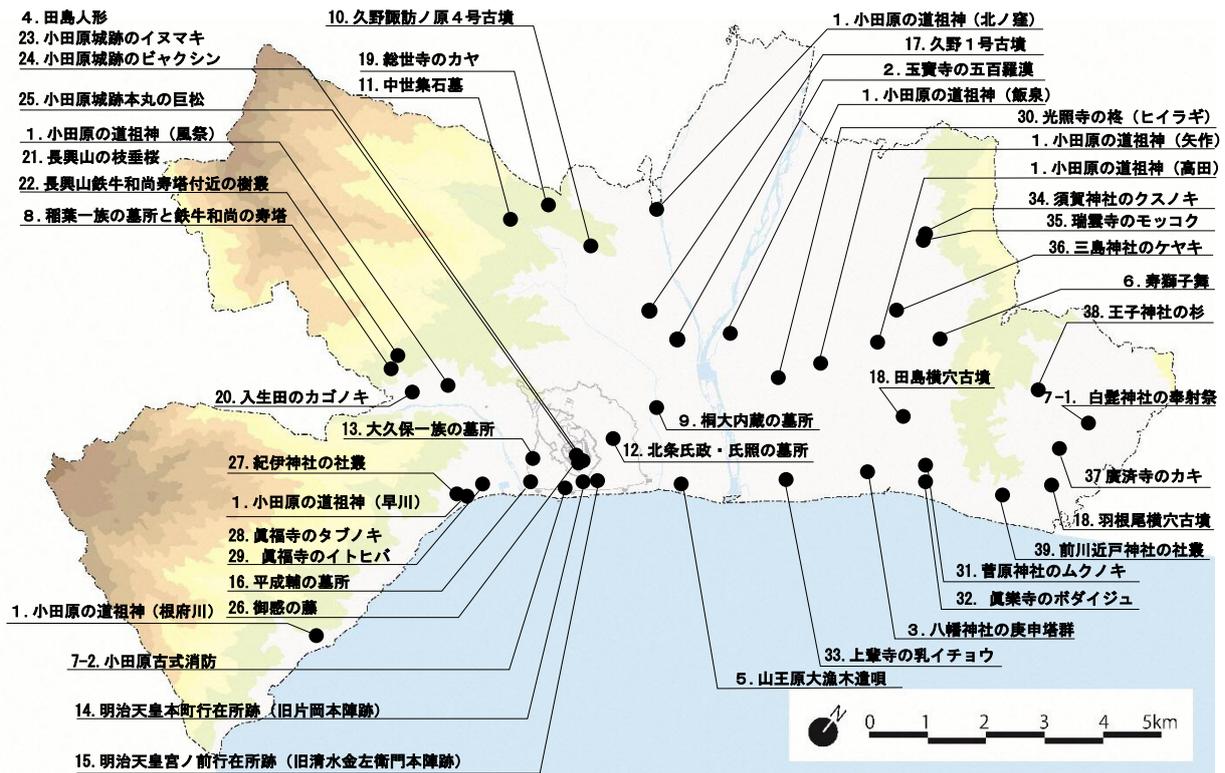
19		かたなめい そうしゅうじゅうやすはる 刀銘 相州住康春	小田原城天守閣
20		ほんこさねむらさきいとすかけおとしほらまき 本小札紫糸素懸威腹巻	小田原城天守閣

市指定の文化財の一覧（建造物を除く有形文化財）（令和7年（2025）11月現在）

No	種別	名称	所在地	
20	有形文化財	ほうじょうしもんじよ どののしゅいんもんじよ えいりく ねん 北条氏文書(虎ノ朱印文書)永禄4年	小田原市立中央図書館	
21		ほうじょうしもんじよ どののしゅいんもんじよ てんじょう ねん 北条氏文書(虎ノ朱印文書)天正7年	小田原市立中央図書館	
22		ほうじょうしもんじよ どののしゅいんもんじよ てんじょう ねん 北条氏文書(虎ノ朱印文書)天正14年	小田原市立中央図書館	
23		ほうじょうしもんじよ どののしゅいんもんじよ てんじょう ねん 北条氏文書(虎ノ朱印文書)天正9年	小田原市郷土文化館	
24		れんじょういんもんじよ 蓮上院文書	浜町2-1-51 蓮上院	
25		ほうこんこうしもんじよ 寶金剛寺文書	国府津2038 寶金剛寺	
26		あおき けもんじよ 青木家文書	板橋 個人宅	
27		ひろい けもんじよ 廣井家文書	根府川 個人宅	
28		ほうせん じもんじよ 宝泉寺文書	風祭918 宝泉寺	
29		ちやうせん じもんじよ 長善寺文書	小田原市立中央図書館	
30		じやうえい じもんじよ 浄永寺文書	鎌倉国宝館	
31		いなご けもんじよ 稲子家文書	府川 個人宅	
32		いわせ けもんじよ 岩瀬家文書	小田原市立中央図書館	
33		ありうら けもんじよ 有浦家文書	小田原市立中央図書館	
34		いしい けもんじよ 石井家文書	栄町 個人宅	
35		こにし けもんじよ 小西家文書	本町 個人宅	
36		はせがわ けもんじよ 長谷川家文書	曾我谷津 個人宅	
37		ひらつか けもんじよ 平塚家文書	小田原市立中央図書館	
38		よしおか けもんじよ 吉岡家文書	小田原市立中央図書館	
39		つた けもんじよ 津田家文書	小田原市立中央図書館	
40		ほそや けもんじよ 細谷家文書	小田原市立中央図書館	
41		はら けもんじよ 原家文書	中里 個人宅	
42		れんげ じもんじよ 蓮華寺文書	千代815-1 蓮華寺	
43		でんじやう じもんじよ 傳肇寺文書	城山4-19-8 傳肇寺	
44		わだ けもんじよ 和田家文書	小田原市郷土文化館	
45		考古資料	ちよみなみほらいせきだいよんちでんいちごうどこうしゅつど 千代南原遺跡第IV地点1号土坑出土 土器	小田原市郷土文化館
46			ちよみなみほらいせきだいよんちでんいちごうどこうしゅつど 千代南原遺跡第IV地点1号土坑出土 鍛冶関係遺物	小田原市郷土文化館
47			ちよ じいんあとしゅつどかわら 千代寺院跡出土瓦	小田原市郷土文化館
48			ちよみなみほらいせきだいななちでんしゅつどもつかん 千代南原遺跡第VII地点出土木簡	小田原市文化財整理室

市指定の文化財の一覧（建造物を除く有形文化財）（令和7年（2025）11月現在）

No	種別	名称	所在地
49	有形文化財	紙本著彩 小田原城 絵図	加藤図
50			万治図
51			寛文図
52			松原図
53			享保図
54			豊田図
55			文政図
56			天保図
57			弘化図
58			文久図
59			明治図
60			長興山紹太寺の境内絵図
61			鉄牛和尚の血書
62			長興山開発供養塔
63			小田原城再興碑（宝永二年）
64	小田原城再興天守棟札（宝永二年）		
65	小田原城内大日一尊種子板碑		



1-84 市指定の文化財の位置（民俗文化財、記念物）

1-85 市指定の文化財の一覧（民俗文化財、記念物）（令和7年（2025）11月現在）

No	種別	名称	所在地	
1	民俗 文化財	小田原の道祖神	飯泉1105-1ほか6か所	
2		玉寶寺の五百羅漢	扇町5-1-28 玉寶寺	
3		八幡神社の庚申塔群	小八幡3-1-1 八幡神社	
4		田島人形	小田原市郷土文化館	
5		無形の民俗 文化財	山王原大漁木遣唄	東町
6			寿獅子舞	曾我別所
7-1			白髭神社の奉射祭	小船609 白髭神社
7-2	小田原古式消防	本町		
8	史跡	稲葉一族の墓所と鉄牛和尚の寿塔	入生田467 墓所、 入生田454 寿塔	
9		桐大内蔵の墓所	扇町1-15-7 長安寺	
10		久野諏訪ノ原4号古墳	久野2575-イ-2	
11		中世集石墓	久野3256	
12		北条氏政・氏照の墓所	栄町2-7-8	
13		大久保一族の墓所	城山4-24-7 大久寺	
14		明治天皇本町行在所跡（旧片岡本陣跡）	本町3-12-3	
15		明治天皇宮ノ前行在所跡（旧清水金左衛門本陣跡）	本町3-5-25	
16		平成輔の墓所	南町3-10-34 報身寺	
17		久野1号古墳	穴部44	

18		たじまおよ へね およこあな こふん 田島及び羽根尾横穴古墳	田島1073-1ほか、 羽根尾362
----	--	-----------------------------------	-----------------------

市指定の文化財の一覧（民俗文化財、記念物）（令和7年（2025）11月現在）

No	種別	名称	所在地
19	天然記念物	そうせいじ 総世寺のカヤ	久野3670 総世寺
20		いりゆうだ 入生田のカゴノキ	入生田127
21		ちようこうさん しだれざくら 長興山の枝垂桜	入生田470
22		ちようこうさんでつきゅう おしろうじゅうとう ふ きん じゅぞう 長興山鉄牛和尚寿塔付近の樹叢	入生田470ほか
23		おだわらじょうあと 小田原城跡のイヌマキ	小田原城址公園
24		おだわらじょうあと 小田原城跡のビャクシン	小田原城址公園
25		おだわらじょうあとほんまる おおまつ 小田原城跡本丸の巨松	小田原城址公園
26		ぎょかん ふじ 御感の藤	小田原城址公園
27		きいじんじゃ しゃぞう 紀伊神社の社叢	早川1183-2ほか 紀伊神社
28		しんぶくじ 眞福寺のタブノキ	早川892 眞福寺
29		しんぶくじ 眞福寺のイトヒバ	早川892 眞福寺
30		こうじょうじ ひいらぎ 光照寺の 柎（ヒイラギ）	鴨宮753 光照寺
31		すがわらじんじゃ 菅原神社のムクノキ	国府津1752 菅原神社
32		しんらくじ 眞樂寺のボダイジュ	国府津3-2-22 眞樂寺
33		じょうはいじ ちち 上輩寺の乳イチョウ	酒匂2-44-27 上輩寺
34		すかじんじゃ 須賀神社のクスノキ	上曾我902 須賀神社
35		すいりんじ 瑞雲寺のモッコク	上曾我902 瑞雲寺
36		みしまじんじゃ 三島神社のケヤキ	千代278 三島神社
37		こうさいじ 廣濟寺のカキ	中村原691 廣濟寺
38	おうじんじゃ すぎ 王子神社の杉	沼代506 王子神社	
39	まえがわちかど じんじゃ しゃぞう 前川近戸神社の社叢	前川1431ほか 近戸神社	

(4) 国の登録有形文化財

千世倭樓の主屋と土蔵

千世倭樓は、秋田県平鹿郡地方で江戸末期から明治初期頃に広まった^{まがりや}曲屋形式を継承する住宅である。木造一部2階建てで、^{いりもやづくり}入母屋造の屋根を架け、豪壮な外観としている。直線状の梁を用いた梁組、^{ぬきつか}貫と束を多用した軸組や小屋組、優れた飾りの床が見られる座敷などに、近代の造形が顕著に認められる。(明治中期建築／平成12年(2000)移築)



1-86 千世倭樓主屋

旧豊島家住宅主屋と門及び塀

旧豊島家住宅は、小田原中心部^{さかえちよう}(栄町)の旧武家地に位置し、昭和16年(1941)に建てられた。平屋建^{いりもやづくり}入母屋造^{いりもや}棧瓦葺で、庭に面して入母屋の妻を両端に掲げ格式を高めている。奥に庭に面した縁側を通して八畳、六畳、四畳半を並べた、端正な座敷を有する上質な近代和風住宅である。門は、腕木門形式^{きりづまづくり}の切妻造^{きりづまづくり}棧瓦葺で、総延長28mの塀は、主屋とともに城下町の旧武家地の様相を伝える。現在は小田原市所有。



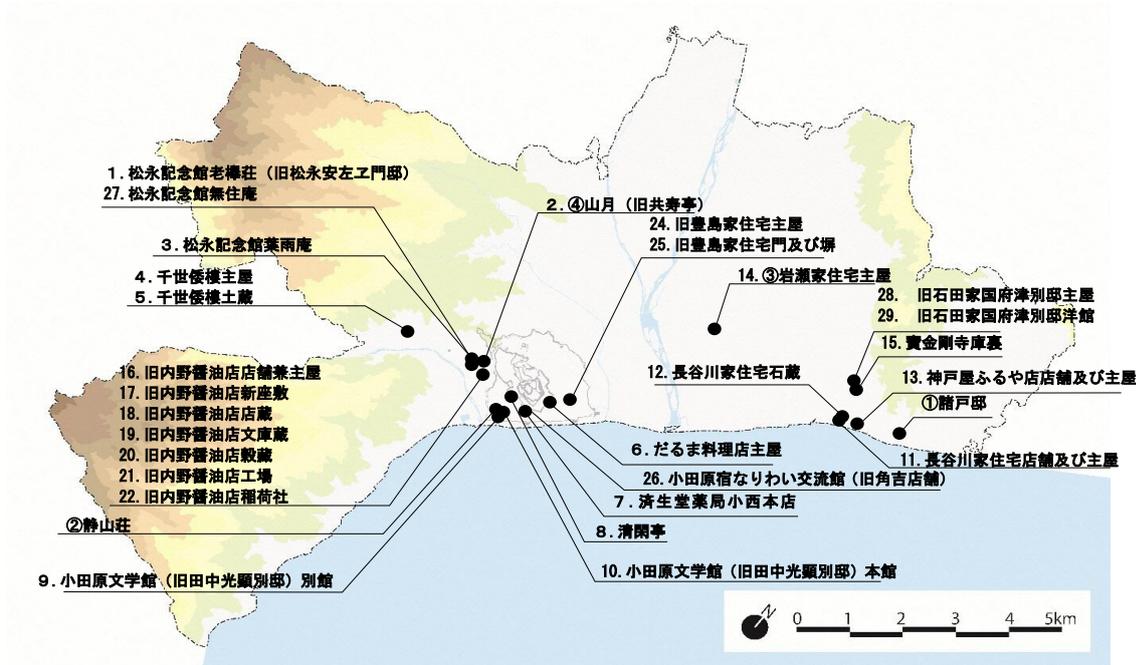
1-87 旧豊島家住宅主屋

神戸屋ふるや店店舗及び主屋

神戸屋ふるや店店舗及び主屋は、国府津駅から国道1号に出る角地に建つ建築物である。タクシー会社の車庫兼社屋として建てられたもので、現在では車庫部分を店舗として利用している。^{こうづ}国府津に多く見られる看板建築(洋風石造建築の外観をモルタルなどで模した建物)の好例である。



1-88 神戸屋ふるや店



1-89 国の登録有形文化財及び小田原ゆかりの優れた建造物の位置

1-90 国の登録有形文化財の一覧 (令和7年(2025)11月現在)

No	種別	名称	所在地
1	建造物	まつながきねんかんろうきさよつり きゅうまつながやす さ え もんてい 松永記念館老樗荘(旧松永安左エ門邸)	板橋513-7
2		さんげつ きゅうきまうじゆてい 山月(旧共寿亭)	板橋913
3		まつながきねんかんろうきさよつり 松永記念館葉雨庵	板橋941-1
4		おちや 千世倭樓主屋	風祭50
5		おちや 千世倭樓土蔵	風祭50
6		りょうりてんおもや だるま料理店主屋	本町2-1-30
7		さいせいどうやつぎやくこにじしほんでんてんほ 済生堂薬局小西本店店舗	本町4-2-48
8		せいかにてい 清閑亭	南町1-5-73
9		おたわらぶんがくかん きゅうたなかみつあきべつてい べつかん 小田原文学館(旧田中光顕別邸)別館	南町2-3-18
10		おたわらぶんがくかん きゅうたなかみつあきべつてい ほんかん 小田原文学館(旧田中光顕別邸)本館	南町2-3-4
11		はせがわけじゅうたくでんほ おもや 長谷川家住宅店舗及び主屋	国府津3-13-4
12		はせがわけじゅうたくいしぐら 長谷川家住宅石蔵	国府津3-2-25
13		こうべや でんてんほ おもや 神戸屋ふるや店舗及び主屋	国府津4-2-18
14		いわせ けいじゅうたくおもや 岩瀬家住宅主屋	鴨宮692
15		ほうこんそうじくり 寶金剛寺庫裏	国府津2038
16		きゅううちのしょうゆでんてんほけんおもや 旧内野醤油店店舗兼主屋	板橋600ほか
17		きゅううちのしょうゆでんしんさしき 旧内野醤油店新座敷	板橋598ほか
18		きゅううちのしょうゆでんみせでら 旧内野醤油店店蔵	板橋602ほか
19		きゅううちのしょうゆでんぶんこぐら 旧内野醤油店文庫蔵	板橋600
20		きゅううちのしょうゆでんこぐら 旧内野醤油店穀蔵	板橋604-イほか
21		きゅううちのしょうゆでんこうじょう 旧内野醤油店工場	板橋600ほか
22		きゅううちのしょうゆでんいなりしや 旧内野醤油店稲荷社	板橋602
23		きゅううちのしょうゆでんおもてべい 旧内野醤油店表塀	板橋598ほか
24		きゅうとしまげじゅうたくおもや 旧豊島家住宅主屋	栄町4-700-1
25		きゅうとしまげじゅうたくもん べい 旧豊島家住宅門及び塀	栄町4-700-1
26		おたわらじゆく こうりゅうかん きゅうかどさちてんほ 小田原宿なりわい交流館(旧角吉店舗)	本町3-6-23
27		まつながきねんかんむじゅうあん 松永記念館無住庵	板橋513-7
28		きゅういしだけこうつべつていおもや 旧石田家国府津別邸主屋	国府津2064-3
29		きゅういしだけこうつべつていようかん 旧石田家国府津別邸洋館	国府津2064-3

(5) 小田原ゆかりの優れた建造物

本市にある建造物のうち、建築技術や意匠に優れ、かつ、わが国の政治、経済、芸術等に貢献した人にゆかりがある建造物を、本市独自の制度で小田原ゆかりの優れた建造物として認定している。

岩瀬邸

岩瀬邸は、安政4年(1857)～5年(1858)に建築された建物で、戦後、三越の社長として長年財界で活躍した岩瀬英一郎の生家である。

幕末から明治期の豪農の住宅の形態を残す貴重な茅葺き農家造りである。力強い重量感を持ちながらも、控え目で、上品な静けさを感じる建物であり、内部も余計な飾りが無い。安政4年(1857)の建築時の平面図が残されており、これと比べると、ほぼ建築当初の形態をとどめていることがわかる。特に、通常は使用していない来賓用の玄関が当時をしのばせ貴重である。



1-91 岩瀬邸

庭は、樹木、塀等が効率よく並び、外の騒音を遮断しており、松煙塗りの黒板塀と力強い御影石の門柱が民家風の外観の建物と良く調和している。

1-92 小田原ゆかりの優れた建造物の一覧 (令和7年(2025)11月現在)

No	名称	所在地
①	諸戸邸	国府津5-8-4
②	静山荘	南町3-1-20
③	岩瀬邸	鴨宮692
④	山月(旧共寿亭)	板橋913

(6) 主な未指定文化財

本市には、長く地域で愛され大切に守り継承されている、地域の宝ともいえる文化財が多数存在しており、ここにその一端を紹介する。

光円寺のイチョウ

小田原城跡の上方（現、板橋）見附の傍らに建つ光円寺の境内にそびえるイチョウである。樹齢は300年程度、樹高は40mあり、遠方からもよく望むことができる。江戸時代、F・ベアトが撮影した小田原宿の写真のほか、明治時代の早川口からの写真（櫻木達夫編著『昨日の道 去年の坂』）には、画面中央に映り、往時、東海道を往来する人々にとってランドマーク的存在であったことがうかがえる。



1-93 早川口から臨む光円寺のイチョウ

小田原用水

小田原用水は、箱根芦ノ湖を水源とする早川の水を小田原の旧城下町に送る水路で、取水堰は国道1号の上板橋交差点近くに設けられている。日本で最古の上水道といわれ、天正18年（1590）の小田原合戦に関する絵図にも描きこまれている。



1-94 小田原用水

荻窪用水

荻窪用水は、寛政9年（1797）から享和2年（1802）にかけて、小田原藩の水田開発事業として開かれた全長10.3kmの用水路である。古くは湯本堰とよばれていた。水源はやはり早川で、箱根町塔ノ沢の東京電力（株）山崎発電所取水ダムの近くに取入口が設けられており、ここから旧東海道沿いに山の中腹を掘り抜き小田原市風祭へ、さらに遂道（トンネル）で山を越えて荻窪へと引水されていた。荻窪の字駒形に荻窪用水を利用した水車が1軒残っている。



1-95 荻窪用水を利用した駒形水車

ほうじょうげんあん きょかんあと
北条 幻庵の居館跡

ほうじょうげんあんそうてつ
北条 幻庵宗哲（永正元年（1504）頃～天正 17 年（1589））は、伊勢宗瑞（北条 早雲）の末子で、大永 4 年（1524）から天文 7 年（1538）頃まで箱根権現の別当をつとめた。天文 10 年（1541）、兄の 2 代氏綱が逝去した後は、一族の長老的な存在として 3 代氏康、4 代氏政を支えた。また、北条一族の中でも文化的素養のある人物として知られる。久野にある居館跡には、屋敷の遺構と伝えられる庭園があり、地域で大切に保存され、継承されている。



1-96 幻庵作と伝えられる池

たじま ふうがいくつ
田島の風外窟

たじま ふうがいくつ
田島の風外窟は、江戸初期の禅僧、風外慧薫（永禄 11 年（1568）～承応 3 年（1654）カ）が住んでいたと伝えられる洞窟で、古墳時代の 7 基の横穴墓を転用している。風外慧薫は、元和年間に小田原に入り、成田の成願寺の住職を務めたが、元和 8 年（1622）頃から 7 年ほど、上曾我と田島の洞窟に入って修行したと伝えられている。風外は洞窟の近在に住む崇拜者から布施を受け、その代わりに仏僧の画を与えて、洞窟生活を続けていたとの伝承があり、地元にはその絵画が伝存している。



1-97 田島の風外窟

かやまたうえうた
栢山田植歌

かやまたうえうた
栢山田植歌は、田植えをする農家の女性たちが、田植えの調子を取るために歌ったものである。明治期から昭和 40 年代の初めまで、御殿場から早乙女が出嫁ぎにやってきて、栢山や曾我などに田植歌が伝えられたといわれている。歌詞には、農作業の様子や領主の館の様子のほか、豊作の祈りを込め、鶴や亀のめでたい動物が詠み込まれている。栢山田植歌保存会は長期にわたり市内小学校の農業体験や後継者育成発表会で活動してきたが、構成員の高齢化とともにその継承が危惧されている。



1-98 田植え作業に合わせて歌う
栢山田植歌

(7) 小田原市の特産品

「新編相模国風土記稿（天保 12 年（1841））には、小田原地方の土産として、小田原宿の透頂香（ういろう）、鰹鮓（塩辛）、提燈、梅実、石橋や米神、前川の蜜柑、石橋や米神、根府川の根府川石や小松石、久野の柿実や梨子、蕨、海産物のタイやマグロ、カツオ、ヒラメ、アジ、サバが掲げられている。これらは小田原城下や近隣の村々へ流通していたと考えられるが、明治時代に入ると交通網の発達とともに販路を広げ、生産量が増える物産も出てきた。

①漁業に関わる特産品

小田原地方は、定置網漁業地として知られており、その中心的な漁場は、江之浦や米神である。とはいえ小田原の漁業は、江戸後期とされる定置網の導入以前から着実に発展していたと考えられ、江戸初期には海岸沿いの早川・山王原・酒匂・小八幡等の村々に藩から舟役が課せられていた。また、寛文 12 年（1672）の漁業関係の記録には、四艘張網、海老網、鰹網、棒受網、鯛長縄、ぼら網などの張網漁業が行われていたことが記載されている。そして大正時代になると、小田原町の産業の中で、水産業は、第 1 位の産額を占めるほど、活況を呈することとなった。

鎌倉後期、小田原の海岸では藻塩が生産されていた（「十六夜日記」）。戦国時代には、前川で塩田による製塩が行われていたことが確認される（「前羽村誌所収文書」）。漁獲量の増加に伴い、カツオのたたきや塩辛が製造され、宿内の名物として知られていたが、これらの製造にも地元産の塩が用いられたと考えられる。



1-99 小田原海濱漁網（東海道名所画帖 嘉永 4 年（1851））
（神奈川県立図書館蔵）

小田原蒲鉾^{かまぼこ}

現在広く知られている小田原蒲鉾^{かまぼこ}は、小田原地方の沿岸漁業が盛んになり、漁獲高が著しく増加したため、魚商が鮮魚の売れ残りの魚を有効利用するかたちで天明年間（1781～1789）頃から製造が始められたと伝えられている。明治時代以降、交通の発達と共に販路が拡大し、生産量が急激に増大すると、同中期頃から、小田原のかまぼこ屋を取りまとめる同業者の会がつくられ、現在は小田原蒲鉾協同組合^{かまぼこ}が小田原蒲鉾の品質保持や販売促進に努めている。小田原蒲鉾の特徴として、板付けの蒸し蒲鉾^{かまぼこ}であること、スケトウダラのすり身一辺倒の傾向が全国的に広がる中でグチの使用量が全国一であることが挙げられ、市民のみならず全国的に多くの愛好者を持ち、小田原蒲鉾の知名度は高いとされている。



1-100 小田原蒲鉾

干物

小田原の干物は、江戸時代、地場で揚がるアジ、カマスを原料として、魚の仲買業により製造が始められた。今では、地場産を始め、世界各地でとれたマアジ、ムロアジ、カマス、イワシなど旬の魚を原料に、伝統的な技術と衛生的な量産設備で、年間 6,000 トンの塩干品が生産され全国に出荷されている。

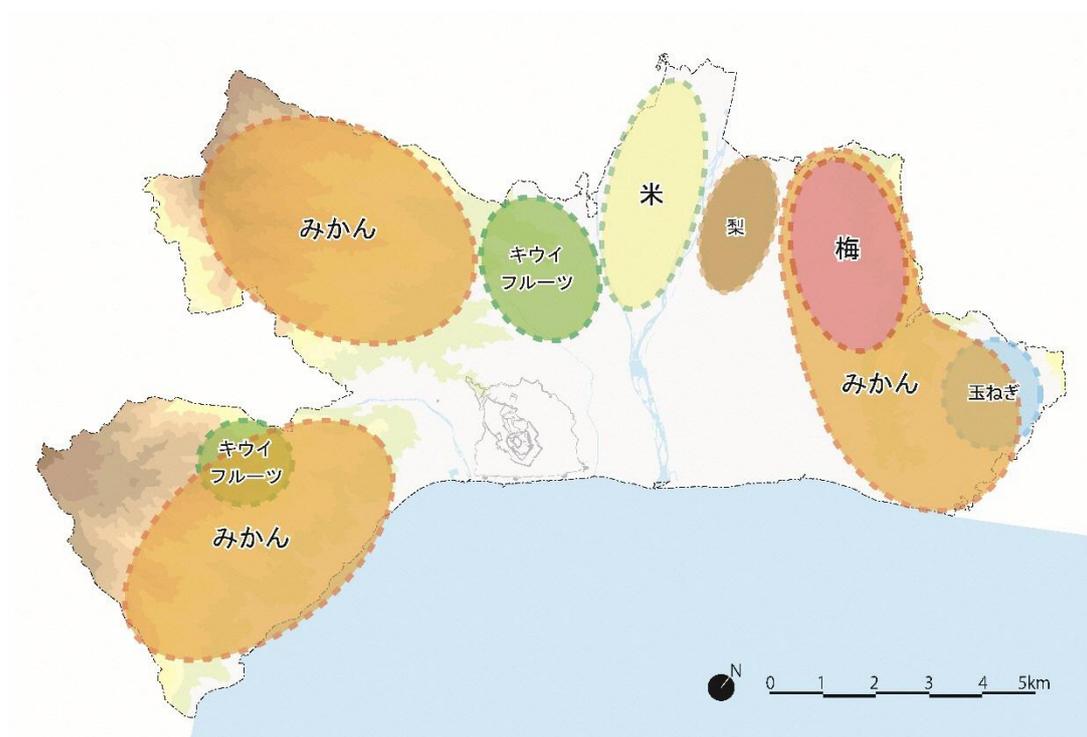


1-101 干物

②農業に関わる特産品

小田原市の農業は、梅やみかん、水稻の栽培に代表される。梅は北東部にある曾我梅林の周辺、みかんは西部の箱根外輪山東麓の片浦や早川、東部の大磯丘陵周辺の曾我や国府津などを中心に栽培されている。また、水稻は神奈川県下有数の米どころである酒匂川流域の平野部で栽培されている。

近年では、みかんの転作として、キウイフルーツや、年明けから4月頃に出荷される晩柑類、ビニールハウスを利用した生花などの多様な農作物が生産されている。また、水田転作畑で梨や柿などの果物、玉ねぎや茄子、ほうれん草、大根等の野菜が生産されている。



1-102 小田原市における農産物の主な産地(令和3年(2021)3月現在)

梅

曾我梅林を中心とする小田原における梅の栽培には500年以上の歴史があるとされ、梅干は、疲労回復や解毒効果など多くの効果があることから、江戸時代には旅に欠かせない食品として親しまれている。また、明治期以降には兵士が携行する食料として需要が高まった。



1-103 梅の実

その後、アジア・太平洋戦争後にかけて、一時生産が減少したものの、昭和 30 年代に入ると再び需要が高まり、小田原を代表する特産品に成長した。

今日では梅を菓子に加工する菓匠も多く、甘露梅、梅風露、梅の中など、小田原特産の梅を使った 50 種類以上の名産菓子が製造・販売されている。



1-104 梅干しの製造（天日干し）

みかん

本市において、みかんの栽培は古くから行われており、江戸時代には当地の名産として知られ、明治時代には鉄道の開通に伴って商品化が進んだ。戦時中、みかんの栽培は存続の危機に瀕しながらも、現在に至るまで本市の主要な農産物として広く知られている。

現在、みかんの栽培は箱根外輪山東麓に位置する片浦・早川地域を中心に、市内の広い範囲で行われ



1-105 小田原で採れるみかん

ている。栽培は、古くから丘陵地の地形を利用した段々畑で行われてきた。戦後からは片浦・早川地域を中心として、段々畑の法面に箱根外輪山の溶岩を利用した石積みを設けるようになった。

水稻

酒匂川流域に広がる足柄平野での農業は水稻耕作が中心である。明治後期には、裏作に麦を栽培していた。



1-106 水田

③伝統工芸品

北条氏の時代、小田原には、城下町の発展に伴って職人たちが多く来往し、これら職人たちから伝えられた技術によって、小田原物と呼ばれる茶湯釜の小田原天命や甲冑の小田原鉢、漆器の小田原彫などをはじめとする伝統工芸品が生み出された。

その中には今日まで伝えられ、小田原固有の伝統技術と文化を象徴する物産となっているものがある。

小田原漆器

小田原漆器は、^{いろうるしぬり}彩漆塗の技法を用いた漆器であり、^{ほうじょううじやす}北条氏康が塗師を城下に招いたのを契機に発達したとされている。

原材料の自然な木目を生かした仕上げに特徴があり、昭和 59 年（1984）には通商産業大臣（現、経済産業大臣）指定の伝統的工芸品に指定された。



1-107 小田原漆器

^{はこねよせぎざいく}箱根寄木細工

箱根寄木細工の生産は、江戸後期に^{はこねはたじゆく}箱根畑宿で始められたとされている。当初は^{らんよせぎ}乱寄木や^{たんいもんよう}単位文様が主流であったが、明治初期に静岡方面の寄木技法を取り入れて、^{こよせぎ}連続文様の小寄木の技法などが確立された。街道具産として広く知られ、江戸末期には江戸方面へ出荷されたほか、外国へも輸出されるようになった。



1-108 箱根寄木細工

その後、大正時代に考案された^{くみぎざいく}組木細工も国内外で人気を博しており、小田原市指定重要文化財に指定されているものもある。

もくぞうがん 木象嵌

小田原及び箱根方面の^{もくぞうがん}木象嵌は、江戸時代に手彫りの彫り込み^{ぞうがん}象嵌技法を用いて始められたが、明治時代の^{しらかわせんせき}白川洗石によって糸鋸引き抜き^{もくぞうがん}木象嵌技法が開発され、量産技術が確立された。



1-109 木象嵌

提灯

小田原提灯は、江戸中期に小田原の提灯職人^{じんざ}甚左衛門^{えもん}が考案したといわれている。

本体部分を蛇腹形状に折りたたむことができ携帯しやすく、中骨が平たく、紙との接着面が大きいために雨や霧で濡れても剥がれにくいのが特徴である。

作業工程も比較的単純で安価であり、一部材料に使った^{だいゆうざんさいじょうじ}大雄山最乗寺の神木を用い、魔除けになると宣伝したこともあわせて、大いに人気を博した。

小田原のシンボルの1つともなっており、小田原駅構内には巨大な小田原提灯が設置されている。

また、毎年行われる小田原ちょうちんまつりに際しては、市内の小学生が趣向を凝らして製作した小田原提灯が^{おだわらじょうあと}小田原城跡本丸広場に展示されており、小田原宿なりわい交流館では観光客向けに小田原提灯の製作体験も行われている。

なお、昭和50年(1975)に発足した小田原ちょうちん保存会が小田原ちょうちん踊りを考案し、小田原ちょうちん踊保存会により小田原提灯の再認識と普及に努めている。



1-110 小田原提灯



1-111 小田原ちょうちん夏まつり(小田原城の堀に映る小学生製作の提灯)



1-112 小田原ちょうちん踊り

鋳物

小田原における鋳物生産は、天文3年(1534)に河内から来往した山田二郎左衛門が鋳物業を開いたことに始まるとされる。「北条氏康朱印状(相州文書)」などによると、山田は北条氏の発注する日用品や兵器の製作にあたっており、鋳物師の棟梁を務めていたことが確認される。また江戸時代に入り大久保氏の時代には、相模国における鋳物生産の5割を占めていた。

「釜師由緒」(元禄13年(1700))によれば、小田原で鋳造された茶湯釜は小田原天命と呼ばれ、関東名茶湯釜の1つであったことが知られるが、山田はその生産にもあたっていたと考えられている。

小田原の伝統的な鋳物技術は、今日、楽器のシンバルや風鈴の生産などに引き継がれている。



1-113
小田原風鈴

④その他の特産品

石材

広大な関東平野が広がる関東地方において、硬質な火山岩を採石できる地域は限られているが、小田原市周辺では箱根火山の恩恵により多くの火山岩を採石することができ、古くから石膏の存在が確認されるなど、人と石材とのかかわりを確認することができる地域となっている。「新編相模国風土記稿」にも、市内所在の7つの村の特産品として石材が掲げられている。

また、小田原及び箱根地方では中世前期の石塔が多数確認されるが、銘文によると、奈良西大寺系の石工が製作に関与していた例が確認される。畿内よりもたらされた最新の加工技術がこの地に伝播していたことを示す重要な事例の1つといえる。その後、中世後期の北条氏の時代には大窪(現、板橋)在住の石切の存在が確認されており、その技術はこの大窪石切にも継承されたと見ることができる。

大窪石切は、江戸時代以後も、江戸城(千代田区ほか)や駿府城(静岡市)の石切御用、品川台場の造営などにあたっている。

国指定の史跡である江戸城石垣石丁場跡のうち、市内所在の早川石丁場群関白沢支群は、江戸城石垣用の石材を採石した石丁場である。この他にも、市内には多くの石丁場の跡が確認されており、久野などの山間部は小田原城用、片浦地域などの海浜部は江戸城用の石丁場であったと考えられている。その後、江戸城石垣の構築が修築すると、石材採取を担当した各大家は管轄する御用丁場を名主に管理させ、のちの石垣普請に備えていくこととなる。このほか、村の入会地などを借り受けて民営で運営する名主丁場や

商人資本による商人丁場なども開設され、片浦^{かたうら}地域を中心に多くの石丁場が運営されていた。

良好な石材の産地という自然条件とこうした歴史的な前提のもと、小田原市内には現在も多く石材加工業者が存在している。

(8) 日本遺産

「旅人たちの足跡残る悠久の石畳道—箱根八里で辿る遥かな江戸の旅路」

箱根八里とは、小田原宿から箱根宿までの4里（約16キロ）と箱根宿から三島宿までの4里を合わせた東海道の旅路を指す。江戸時代に整備された五街道の中でも屈指の通行量を誇る東海道は、参勤交代の西国大名や江戸参府のオランダ^{えどさんぶ}商館長^{しょうかんちやう}、朝鮮通信使^{ちやうせんつうしんし}や長崎奉行など、著名な歴史上の人物が数多く往来したことから、道中にはさまざまな旅人たちのエピソードが残っている。また風光明媚な場所や名所旧跡が多く、浮世絵や和歌、俳句などの題材にもしばしば取り上げられている。小田原市、箱根町、静岡県三島市、函南町に跨る、この歴史ある旅路が平成30年（2018）5月24日に日本遺産として認定された。

小田原宿は箱根八里の東の起点であり、江戸を発った旅人が初めて目にする城下町で、箱根越えを控え、にぎわいをみせていた。小田原城跡は、復興された天守閣や城門などの白壁、石垣、水堀の景観などに城下町時代の名残りを伝える。かまぼこ通りは、相模湾で揚がる鮮魚を加工した蒲鉾^{かまぼこ}の販売販路を周辺の温泉宿などへ拡大し、小田原の名物に育てあげた老舗群を中心に、落ち着いた商家の佇まい^{たたり}をとどめている。歌舞伎の外郎売^{ういろり}で知られた老舗のういろうは、戦国時代から続く薬種商で、薬を販売するかたわら、甘い菓子^{ういろり}のういろうを代々小田原で作り続けており、これらが小田原宿を象徴する構成文化財となっている。



1-114 小田原城跡



1-115 かまぼこ通り



1-116 ういろう

